

THE  
BIBLE TRUE.

by

Rev. William S. Plumer.

Translated by

TAKENOBU KIKUCHY.

版權  
所有

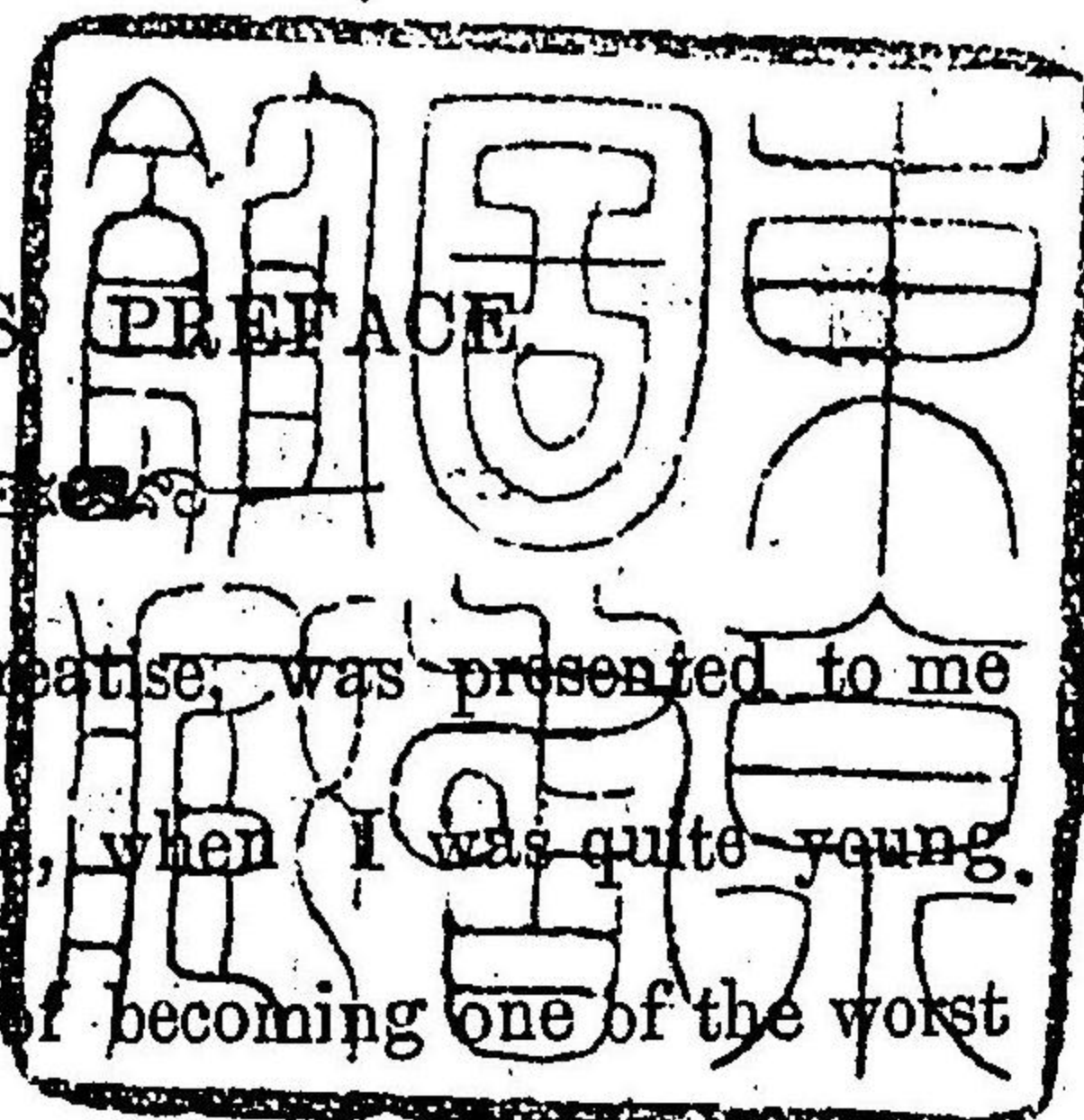
福原忠茂

西  
教  
辨

米國神學士普蘭摩氏著

日本  
菊池武信君譯述  
佐藤蛻翁閱

TRANSLATOR'S PREFACE



The original of this little treatise, was presented to me by Miss Kate M. Youngman, when I was quite young. At that time, I was in danger of becoming one of the worst of skeptics. I read the book through and through till I felt, that Infidelity was truly destructive and wicked, and that Gospel was truly precious and true.

I have attempted several times to translate the book, in order to have any who may stand on the same dangerous ground as I then did, to see and feel as I did. After much delay I thank God that He has been pleased to permit the fulfillment of my desire, and allow me to be successful in publishing this translation. I would say with the author, "Such as it is, it is commended to God, whose blessing alone can make it useful."

T. Kikuchy.

Tokio, December 10 th, 1885.

原書ノ緒言

此小冊子ハ基督教ヲ辨スルニ最モ緊要ナル  
事件ヲ簡單ニ述ベタルモノニシテ格別新奇  
ナル妙説ヲ録セズ蓋シ此書ハ多ク學問スル  
ノ暇ナキ彼ノ俗間ノ需ニ供シ識者ノ爲メニ  
スルニ非ズ某大部ノ書ヲ著シテ以テ充分已  
レノ意ヲ述ルハ反テ容易ノ事ナリト雖某ノ  
目的素ヨリ小冊子ヲ作テ以テ廣ク世ヲ益ス  
ルニ在ルヲ奈何セン但シ此書ヲシテ有益ナ  
ラシムルト否トハ獨リ上帝ノ意ニ任ズト云  
爾

凡例

- 一 原書ノ緒言にいへる如く此の書は廣く俗間に行は  
れ易きを專要として作れるものなれば譯者勉めて  
其の全文を平易に漢字には成るべく假名を附し  
たり
- 一 一篇中の引用語は成るべく辨別し易からしめん事を  
欲し漢文若くは片假名まじりの文を以て記せり
- 一 原著者若くは譯者の解註に係るものは( )の中に記  
せり
- 一 人名地名は漢字若くは片假名を以て書し人名にハ

其の右傍に單線を附し地名よむ復線と附き

柳蛙記

西教辨目次  
總論之部

片葉數

第一	公平心の事	一
第二	道理論窮の事	二
第三	人智は微弱ある事	四
第四	證據の種類の事	七
第五	蘊奥と無道理の差別の事	九
第六	聖書を除きて他に信用すべき宗教ある事	十一
聖書論之部		
第一	新舊兩約書の偽作の書にわらざる事	十五
第二	希臘語に翻譯したる舊約全書の事	二十二
第三	異説の宗派互に相保証する事	二十三

黙示論之部

二十七

奇跡論之部

三十一

- 第一 神が教法を人へ黙示するの無道理にあらざる事二十七
- 第二 聖書の即ち神の黙示なる事二十八
- 第一 基督は奇跡を行ふたる事三十一
- 第二 奇跡を以て黙示を証する事三十八
- 第三 回々教祖の奇跡の事四十
- 第四 天主教の奇跡の事四十一
- 預言論之部
- 第一 預言の黙示の徴據となる事四十三
- 第二 世界萬國に關する預言の事四十五
- 第三 西拉斯(帝王)に關する預言の事四十五

- 第四 ヲロ(Tyre)に關する預言の事四十六
- 第五 亞拉比亞人に関する預言の事四十六
- 第六 基督に關する預言の事四十七
- 第七 耶路撒冷に關する預言の事四十八
- 第八 猶太人に關する預言の事四十八
- 雜証の部
- 第一 聖書文章の事五十一
- 第二 聖書は人品を改良する事五十二
- 第三 聖書は人心を慰むる事五十四
- 第四 シムルデー及びハリホルトン比較の事五十五
- 第五 保羅及びギッポン比較の事五十九
- 第六 時代の經過するに従ひ証據益判然とる事六十二

辨駁之部

- 第一 天文學を以て基督教を駁するを辨ず 六十三
- 第二 地質學を以て基督教を駁するを辨ず 六十九
- 不信仰の原因數項を擧ぐ 七十七
- 第一項 不貞の品行は不信仰の原因とある事 七十七
- 第二項 惡樹と善菓を結ばざる事 七十八
- 第三項 自ら無識に安じて教理を研究せざる事 七十九
- 第四項 不信者は一般に氣質不良ある事 八十一
- 第五項 自負は不信仰の原因となる事 八十四
- 第六項 奇と好むは不信仰の原因となる事 八十七
- 第七項 無病息災は不信仰の原因とある事 八十八
- 第八項 貪慾は不信仰の原因とある事 八十九

- 第九項 肉情に従ふは不信仰の原因とある事 九十
- 第十項 名聞は不信仰の原因となる事 九十三
- 第十一項 不信者は猥褻なる事 九十五
- 第十二項 邪説を保守するは不信仰の原因となる事 九十五
- 第十三項 不信者は信義を貴重せざる事 九十七
- 第十四項 論結 百一
- 不信仰は有害無益なる事を論ず 百三

- 第一 概論 百三
- 第二 證據を擧ぐ 百四
- 第三 佛國の景况 百六
- 第四 不信者臨終の有様 百七
- 附言 百十五

目次終

目次終  
第一 夫非難者を満足せしむると横行者を訓導すると頑固者を心服せしむると忿怒者を歡喜せしむるは四の甚しき勲事なり之に反し温順なる人を教へ公平なる人を満足せしめ純朴ある人を導き實直なる疑團を溶解するは事の甚容易なるものあり凡て真理の探究に於るや人の智愚に従て結果の遲速あり語よ云く一言ノ智者ニ徹スルハ百鞭ノ愚者ニ徹スルヨリモ勝レリ

米國神學士 普蘭 摩氏 著  
日本南筑 佐藤 喜峯 閱  
全 菊池 武信 譯

第十 本心の事

總論之部

夫非難者（たひなんしや）を満足（まんぞく）せしむると横行者（わうかうしや）を訓導（くんだう）すると頑固者（ぐわんとこしや）を心服（しんぷく）せしむると忿怒者（ふんごしや）を歡喜（くわんき）せしむるは四（よつ）の甚（はなはた）しき勲事（くんじ）なり之（これ）に反（はん）し温順（おんじゆん）なる人を教（おし）へ公平（こうへい）なる人を満足（まんぞく）せしめ純朴（じゆんぱく）ある人を導（みちび）き實直（じつちよく）なる疑團（ぎだん）を溶解（とくげ）するは事（こと）の甚（はなはた）容易（たうい）なるものあり凡（すべ）て真理（しんり）の探究（たんきゆう）に於（お）るや人の智（ち）愚（ぐ）に従（したが）て結果（けつこ）の遲速（ちそく）あり語（こと）よ云（い）く一言（いちげん）ノ智者（ちしや）ニ徹（てつ）スルハ百鞭（ひゃくべん）ノ愚者（ぐしや）ニ徹（てつ）スルヨリモ勝（まさ）レリ

（所羅門の箴言）と故に人の性質に従ひ宗教上に其結果

の異同を見るは怪しむに足ざるなり。既に云く性ハ萬事ト此言たる宗  
 教上に於ても亦誠に然り彼の稚兒の如き朴直なる心を以てするときは  
 は宗教とあく學術となく能明かに之を理會することを得べし上帝は  
 智者學者が其傲慢に頼り決して知ること能はざる事をば彼の好みて  
 問ひ樂みて學ぶ所の稚兒の輩に之を悟らしむ然れば各先其心を省ま  
 ざるべけんや

第二 道理論窮の事

人は事物の道理を論窮するの力を有するを以て禽獸と異なるなり而  
 して其之を論究するに於て彼此解する所あるは智愚の別あるを以て  
 なり聖書の決して公正の理論に間然するものも非ず反て吾人が力を  
 竭して道理を論窮せんことを勸勵督促するものなり故に吾輩敢て論  
 理を妄用せず只偏見私情より生ずる所の感化力と公明平心より出る

所の指揮との間を審かば辨別し務めて公正の論理法に従て之を論窮  
 をべし抑上帝の默示に關し論窮すべきことは大約左の如し  
 一上帝は果して默示を世人に與へたるや否や  
 二若し果して之を與へたること確實ならば其默示あるものは何物な  
 るや

扱て吾輩上帝は斯々の事件を世人に默示すべしと豫じめ己れが心に  
 定めて之を探究するが如きハ全く論理の範圍に属せざるなり蓋し人  
 若し豫じめ聖書に記載すべき事件を一々知り盡したらんには豈其默  
 示を要す可けんや實は人の既に知る所のものは默示せるに由なし然  
 れども吾輩聖書は上帝の賜なるかを探究すべし否探究せざるべから  
 ず吾輩此問題を探究確定するハ最も重大の義務なり而して吾輩は確  
 然此問題を認定せたる上は其默示なるものハ何あるか何を教ふるも



のあるか何を約束するか何を禁ずるか何を命ずるか等の問題を設けて一々之を探究すべし是等の問題は能吾人が道理論窮の能力を練磨するに足るものなり

第三 人智は微弱なる事

前段述し所の問題のみならず総て宗教上の問題を論ずるに當ては先吾輩人智は微弱にして誤謬に陥り易きことを承認せざる可らず又人は時として化粧せる虚妄を見て真正と誤認し瞭然たる真理も反て空理に壓倒せらるゝこと少からざることを知らざる可らず大凡己が智力の弱きを感ぜず己は最上位の受造物にあらざることを悟らず又観察を下して事を論ずるの危険なることを認めざる輩は至貴至尊の者(上帝を)に向て或は駁撃を試みるふとさへ恐ざるべし彼の天地造成の事實と雖固より批評す可らざるは非ず吾輩若し自己の在弱な

る論理と想像とを以て上帝の作爲を評議し或人が曾て宗教を論駁したると同然の論法を以て之を論窮するときは天地造成に係る天帝の大智大能も或は多くの人をして至愚と認定せしむるも敢て難きにあらざるべし蓋し卑陋の論理は能卑陋の思想と適するものあればなり又人間の論窮する所は即ち宗教の燈明にして能我を引導するに足りと信ずるは誤妄焉より甚しきは莫し古今數千年の經驗上よ於ても其然ることを証明せり異教の諸賢も皆其然ることを承認せりヤング先生曾て當時の不信者を論じて曰く己れの智力を以て充分なりと爲す輩は彼の自ら金犢を製作して之に伏拜せしイブラエル人(金犢の事出二章に)の如く無益の信仰に因て至尊の上帝を罔するあり譬へば楊柳の萌芽が松柏に向ひて一撃を試みるが如し蓋し松柏は久遠の昔時天帝親ら之を植え之を保護培養せし教理に比し萌芽は即ち人間の未熟

軟弱なる想像に喩ふと

ツーリン氏亦論じて曰く予をして最も仰天せしめ最も怪異せしめ最も驚駭せしむるもの彼の一小分子の如き動物(人間を)が其細微なる孔中より至小の光線を出しつ、廣大無邊の至上者(指す上帝を)と争はんことを欲し此大地を左右する所の天神に逆ひ其宣ふ所を疑ひ其命する所を拒み加之其親ら示せし充分なる証據あるにも拘はらず力を盡して其教理を排斥せんことを務ることあることなり嗚呼人間よ汝自ら顧みて已は即ち皆無にして無價なるものなるを悟れよ汝既よ狂あるに非ずや汝僅かよ一針尖よ外ならず汝が一小分子に外あらざるの身を以て無量世界の諸天の天も之を容る、に不足なる彼の至上無邊の尊神に向ひ自ら爲す所あらんとするは狂も亦如何なる狂ぞやと扱小兒は帝王が一國を主宰せる政略上の智慧を解すること能はず斯

く人間は永遠の計略を以て宇宙を主宰する天帝の能力を悟ること能はず夫れ此無智愚痴なる吾人は務めて學ぶより善は莫く替者ハ明者の引導を仰くより善は莫し

#### 第四 証據の種類的事

予よ、よ証據の種類に就きて一言するハ無益のことにあらずと思考すベトコン曰はく此を証明せんと欲するときは充分強よき証據を探索し彼れを証明せんと欲するときは左程強よからざる証據を以て足れりと爲すは最とも知識の害となり障りとなる所の原因の一ありと夫れ証據の種類を辨別すること無く相混じて以て事を論ずるは暴論の至極なるものなり例へば幾何學は一種の學術なり然れども其目的たるや物体の大小長短を証明するに過ぎるものなれば假令此學術に據てヴェットリヤは即ち英國の女王なることを証しゾハルナルは即ち、イ

「ニート」の著述者あることを証し空氣と水とは両者がら一種の混合物質なるまを証し或は此處に殺害あり彼處に戦争ありといふことを証せんと欲する者あるも決して爲し能はざるべし斯く一種の學術を以て聖書の眞偽を証明せんと欲するも豈能く得べけんや是故に人學術を以て聖書の眞實なることを証明すること能はず終に反て之を駁撃するが如きは愚も亦甚しと謂ふべし

抑証據なるものは自己の知覺を以て証すべき証據にまれ一目瞭然なる証據にまれ考察を以て証すべし証據にまれ格物究理に由て証明すべきものにまれ遺傳に由て証明すべきものにまれ唯能く論題の性質に適すべき証據あるときは智者は關する所を是故に基督教に於ても若し之を証明すべき適當の証據あらば吾輩當に以て足るを爲すべし假令窮理哲學を以て其眞理なることを証明すること能はざるも

若し公平無私の朴直なる輩をして安心せしむることを得べき証據あらば予は其証據を以て充分ありとあす假令汝豕に珍味を投ぜるも彼恐く之を足下は踐ん假令汝狗に聖物を與ふるも彼恐くは轉じて汝を噬ん(按するに偏僻邪見の者の如何なる)蓋し正當の証據人が保証する所の証據を以て會得するも理論の證據を以て會得するも其會得する所へ等しく當然にして且つ理に協ふものなればなり

第五 蘊奥と無道理の差別の事

扱て蘊奥と無道理と大なる差別あるは人の知ざる可らざる所なり人其胸中に於て充分解得すること能はざる所の事實を以て信用するに足ざるものありと認定するは是れ誠に狹隘の見識を保てる者と謂ふべし此の如き人は固より蘊奥なる事實を信ぜざる人なるが故に彼の生理學動物學植物學重力學電氣學等の眞理をも信用すること能はざ

るの勿論なり上帝の不可思議無邊宇宙に在て最も深遠蘊妙なる者なるを以て大凡蘊奥なる事物を信用せるまに能はざる者は亦必ず上帝を信ずると能はざる人なるは言はずして明あり夫れ吾等が當に爲すべき義務の自己の信仰上に關する事件を自ら會得するも否とを論するに在に非ず唯其事件に就て信用すべき充分の証憑あるや否やを探索するに在り其蘊奥不可思議なるを以て信ず可らざるものと認定するの甚だ拙劣の思想と謂ふべし何とあれば宗教にして絶て奥義ありもの果して人爲の宗教あること明かなればあり  
事の無道理なるものは固より信ずるも足らず譬へば一念同時に於て有と無との二者あることを信用するの吾輩が決して爲し得ざる所なり亦黒ハ即ち白なり部分は即ち全部に等しと信ずる等の如きも決して爲し得可らざる所なり若し聖書にして斯の如きの無道理を教ふる

に於ては吾輩如何ぞ能く其宗教を信用するを得んや然るに其默示の蘊奥にして至妙あるは吾輩之を觀て歡喜咨嗟に堪えざる所あり抑天神の人類を救へんと欲して其子耶穌を世界に降生せしめし事實を天地間の最も蘊奥至妙あることともなり而して吾輩は其事實の至妙不可思議よして吾人が愛心及び想像力の及ぶ所にあらざるを以て益其教法を放棄すること能はざるあり  
第六 聖書を除きて他に信用すべき宗教なき事  
吾輩が聖書を信用すると否とに係らず若し其書を除きて之を棄るとはは全地球に於て一つの信ずるに足るべき宗教はあらざるなり假令吾輩が強て聖書の教理を排棄し他に求めて以て確實ある信仰の道と拜神の法とを得んまを務むるも決して其功を奏せざるべし假令此聖教をして全く虚妄偽言よして信ずるに足らざるものならしむるも

若し此教を光と頼むに非れば人間何の燭を燈して上帝の審判所に至るべき黒闇の路上を歩むを得んや（按ずるにこゝろは此教を奉せずば禍を免れん）此を吾人が最も肅々として考窮せざる可らざるの一大事なり

聖書の信すべきや否やを確定するは靈魂の永福永禍に關し無窮の苦樂に係る吾輩此聖書を棄て用ひざるときは其他の宗教は大概迷信虚妄の説よして教ふる所も亦從て亂なれば或は人間畜生の別を立す或は善と惡とを混じ相當の應報を烏有に歸する等の如き事あり又斯の如き邪教に陥たる狂亂の輩は動もそれバ天帝在るを信じ天帝の義と仁と至誠とを認むる者は決して忠孝有徳の士と爲を得ざるべしと誤想する者さへなきにしもあらず悲哉

今夫れ吾人が須臾も聖書を離る時は磁針無き船に乗て大洋を航する

が如し設令基督教をして妄説ならしむるも其妄説は偶像を拜する異教の妄説に比すれば遙に優れり亦自理學家と唱へて異説を主張する近時の著書家が説きたる妄説よりも更に取る可き所あり又設令基督教をして妄説あらしむるも勸善懲惡の功之も若ものなく世界の文明を擴張し社會の快樂を増進し人心を和し將來の樂を樂しむるもの此宗教を棄て他よあることあし之に反し上帝を信ぜざる者乃趣旨は一言以て之を蔽ふ曰く「我は凡て曖昧ある事を信ず」

聖書論之部

第一 新舊兩約書の偽作の書にあらざる事

今聖書の眞偽を確定すべきため設くる所の第一の論題は即ち是あり  
曰く「吾輩が現に有する所の聖書の果して古代基督教徒が有せしもの  
と同一なるや否や」予は固より其同一あるを認め且これを保証す  
るの予が有する所の他の古典を保証すると毫も異あることなし又恰  
も人今より一千八百年の後まで生存することを得て（實は斯く生存す  
るを以て之）吾輩が今有する所の同じき聖書を保証すると同様に之を保  
証することを得るなり人あり古典を評して曰く世は名家の著作なり  
として珍重する所の書籍甚多しと雖或は偽著ありて信ずるに足らず獨予  
が有する所のシセロの辨論ガイザルの釋義あるもの決して疑ふ可  
らざる眞著あることを保証するなりと然るに此よりも數千倍の強き

証據を以て新約書中のペテロが書翰舊約書中のイザヤが預言其他  
 都で舊新兩約全書の一割の部分の眞にして偽にあらざりて古代の原書の  
 儘に傳來せることを保証するを得べし  
 其証據を試檢する法方は先現今の聖書と古代の聖書を比較し其同一  
 あるや否やを照驗するに在り驗へば爰に紀元一千六百四十三年の初  
 版に係る著書ありとせん今予が有する所の書籍は即ち其第二版あり  
 と云ふ是に於て予彼と此と互に視比べ初めて其眞あるか偽あるかの  
 確証を得べし今此に是論を適用せんに紀元五百年の昔時に於て寫た  
 る新約全書珍り其寫本に載たるものは事實と謂ひ教理と謂ひ今行そ  
 る所の翻譯聖書と毫も異なる所なし昔時基督教を撰滅するの目的  
 を以て殘酷の迫害ありしがために希臘原語を以て寫したる聖書の如  
 きは今より二千三百五十餘年の久し死を經歷したる古寫本より古き

ものはあし吾輩が此より古き寫本を有せざる所以のものは獨此迫害  
 ありしに由て然るのみならず亦古代の基督教徒は現今の吾輩と異あ  
 らず聖書の寫本を子孫累代に傳へんと欲するの目的を以て之を神聖  
 秘密の堂宇又は文庫に藏する等の事絶て之れ無きを以てあり實に基  
 督の徒は古より今に至るまで未だ曾て寶物の秘藏所等を設築せしこ  
 とあらず若し秘藏所の設築を企てたらんには必ず世の嫌疑怨恨を被  
 ひること倍甚しかりしならむ加之印刷術未だ開けざるを以て聖書俗  
 籍の別なく凡そ書籍と名づくべきものは其數至て僅少なりき當時の  
 書籍の字々句句悉皆手を以て筆寫し莫大の時日及び金錢を費すの後  
 漸やく一部の書冊と成せしものなれば盛大ある教會若しくは豪富若  
 しくは賢明なる學士にあらざれば容易に一部の神典を購ひ得る者あ  
 かりき印刷の術既に開けし時代に於てすら尙ほ英國に於て聖書の全

部は通常の役夫が十三年の勞役を以て得たる程の金錢を拂ふに非れば決して獲ること能はざりしなり然らば今日吾輩が聖書の古寫本に乏しく之を有するもの甚だ多からざるも更々怪しむべきやあらず反て其古寫本の幾部何冊か今日まで保存したるこそ實に不思議と謂ふべけれ抑聖書はモーセが見たる所（棘火の如く）三章二節に出づ（火中の苦難は遭遇せしも未だ全く燃盡さず其苦難たるや宗教及び政事）關し非常の暴虐世に行われ上帝の道を撲滅せんことを謀りて王侯親から此舉に盡力し兵力爲め振ひ徒黨爲めに動搖せるよし少からざり人若し聖書を秘藏したるよし露顯せしときは其人必ず四周隣人の爲めに憎まれ時としては至極の苦受ること少らざり然るに聖書の尙は其命を全ふし今日に至るまで上古の寫本生存せしもの多からずと爲す且つ其古寫本は現に吾輩が讀見せる所の翻譯聖書と

毫も意義を異にする所なきあり

又聖書は古代に於て既多の國語に翻譯せられたり予は其翻譯の一を擧て少く論ぜん彼の叙利亞國語に翻譯せられたる聖書は第二世紀の昔時より傳はれるものなりと見ゆたり（ミケリリス）其書の古き証據は翻譯の体裁と謂ひ東洋人の古傳説と謂ひ諸所に在る所の古寫本の性質と謂ひ決して疑ふべき所なし凡そ二百三十年以前叙利亞のアシテオケニ在る高僧其邦語に翻譯せる聖書一部を歐羅巴に贈りて之を印刷せしめたり爾來其書諸所の有識なる教法師の家に傳はれり其他時代を異にし國語を異にする種々の翻譯聖書甚だ夥しく其内或は原文の義を誤り不妥の譯辭を以てせしものなきにしも非らずと雖事實教理を誤りしものは一もあるよし實に古代の譯書は近代の譯書と更々相異なる所あり假令世ふ絶て古寫本の傳はるなく更々翻譯



書のみありとするも吾輩福音の知識を得るの量は恰も英人が佛書を讀むことを學ばず只英譯の佛國史のみを讀みて佛國の事情を知り得ると異なるおどなきなり

又新約全書中の言語文句の古より今に至るまで廣く様々の引証に用ひられたれば假令古今の原書譯書寫本印行本悉皆偕に火中よ投じ千五百年間に窺せし所有聖書を一時に燒失せしむるも尙ほ福音の本義は救世主基督の昇天以來三百年までの間に記録されたる雜書中より拔集することを得べし是れ証據の最も優れて適切あるものあり譬へば爰に三人の記者あり各互ひに時代を異にし國土を異にし主義を異にす此三人皆各一日の説を主張せんと欲して古代録せし所の古典の文章を引用し以て自説の最も正しきことを証せんと欲す然るに其引証する所の文章全く同一して一字一句も相異なる所あり時は曾て原

書を見しことなき人と雖其引証の確實にして原文と同一あることを信するや必せり

斯る証據の其時代愈遠く其土地愈隔り其引証の文句愈多く其文句を引て証すべし目的愈異あり愈反するときは其証據は愈確實あるものとせられたり而して吾輩の聖書は唯三人の記者が其文句を用ひて引証せしものならず夥多の人々或は之を駁し或は之を辨じ各目的を異にし其時日年月を異にし夥しく引証したり其引証の言語文句は大抵同一ならざるは亦く又福音の原質は決して毀損せし所あり

又古代に於て筆記若しくは上梓せし聖書の註釋又は類語集類從等の大概近世の編輯者が作る所と大同小異あり少しく意を留めて是等の書籍を研究するときは必ず自ら其証據の確實あるおとを發明するを得べし若し之を研究するは相應せる學力を以てするに至りては其真

實ある証據彌充滿して溢れ出ること疑ふし  
 扱て舊約全書の真よして偽作にあらざるの証據は予多言を費やさず  
 して明かなり全体猶太人は聖書を正しく保全するよしを非常に務め  
 たりとを一言を以て之を証明し蓋し猶太人聖書を寫すときの一々其  
 字句の數を筆へしのとあらず之を綴りたる假名字の數をも點檢し善  
 く原本と引合せ至極些細の誤も盡く正さすといふことなければあり  
 第二 希臘語に翻譯したる舊約全書のこと  
 今此に猶太國の神典を希臘語に翻譯せし事實を陳するも全く無益に  
 はあらざるべし扱て希臘譯書あるものは紀元前凡そ二百八十八年の  
 頃七十人の學士が埃及國王トレミー一ツツアルファヤスの勅命を奉じて  
 甚だ鄭重に翻譯したるものなり其書の當時世界に於て最も繁榮ある  
 歴山府の書院に藏せり耶穌及び其門弟子の此譯書を用て其教を説け

り抑々希伯来原書の文義を全ふし其譯辭の穩當なるものは此譯書よ  
 如くものよし其譯書は即ち「セプテュアヤント」と號するものにして  
 古今の學者が甚だ貴重するものなり然れば假令一部の希伯来原書が  
 世にあかりしも舊約聖書は決して失ふことあかりしならむ  
 第三 異説の宗派互に相保証する事  
 基督降誕の前後を問はず純全なる正法を傳ふる者と異端の説を唱ふ  
 る者と世間を輩出し互に相競争せり從て其主義を異にする所の宗派  
 交起れり而して「パリサイ」の徒「サドカイ」の徒「エッセヤス」の徒の如く  
 遙に其説を異にするものと雖各己が主義を維持せんと欲し皆同一の  
 聖書を引き其説を証せんことを務めたり基督降世の后に至て猶太教  
 徒基督教徒と其説を異にせるも亦兩ながら今日に至るまで彼の希伯  
 来の聖書を尙び之を研究して以て各自の教理を引証するなり基督の

使徒等が生存せし頃は両徒相争ひて互に入れざりしも今日に至り同一の聖書を用ふるの一點に於ては借に同意を表せり又基督教徒にして或は異説を張り分離して別派を建て相互に敵視するが如き者あるも舊新兩約全書の原質は決して變易あることなし若しも變易増減して以て聖書の文義を飾ることあらん反て其人又其派の体面を汚すものあれば未だ曾て其變易増減を爲さんことを企てし者あり今此に喩を以て本論を解明せん或人子七人あり將に死せんとするに當て遺言証一札を遺せり七子各之を寫して函中ニ保持し肉筆の原書の父の親友に預け置きたり然るも其親友なる者不幸にして火災に罹り家宅盡く焼けたれば其預かりし遺言証も亦焼失せり此災は遺言証を公廳に届出ざる以前にありしを以て未だ公廳の記録に載せざりしも七人の兄弟各己が寫し置きたる証書を法庭に提出し父の遺産

を譲受んことを出願せり其提出せし所の証書各筆力を異にし或は少しく綴字の異なる所もあり或は句点の異なるもありて全く誤なきには非ずと雖讓渡人の真意は各有する所の寫証文を視て明白なり此の事件に就きて裁判官の審判は如何にありしにもせよ讓受人は讓渡人の遺言証に記載したる文意を疑ふと能はず若し兄弟互に和解して各父の遺産を分配し相當の分を所有せしよとに同意を表したらんには則ち法律の趣旨にも戻らず裁判所の目的にも違はず恰も原書に依て審斷したると同様の實効を奏すべし今數百千萬の基督教徒が各同一の聖書を提出して以て己が福祉の証書と爲し品行の誠と爲し信仰の規律と爲すも亦斯の如し聖書の偽作よあらざるは之を以て明白に知るべし夫れ世に書冊記録の種類甚だ夥だしと雖就中人の最も貴重する者は聖書なり最も純潔の書なりと評せらるゝものも亦聖書あり

是故よ予今聖書に即ち古代の基督教徒が有せしものと同一なりと斷言して以て爰に本論を終結す

默示論之部

第一 神が教法を人に默示するは無道理にあらざる事

抑初に人類を造成したる者は當に人類を教導すべしと吾輩が想像するも豈愚と稱するを得んや吾々人類の平常用ふる所の言語を最初神の默示に依りて知り得たるものなるや將た人間の智慧を以て發明したるものなるや古今有識の士が甚だ惑ふ所なり人間の智慧を以て發明せりとの説をあす者と雖神が言語を人間に教ふることに能はず若しくは教ふることを欲せずあとの説を主張する者あし若し斯る説を主張する時は必ず自ら取らざるを明かなればあり  
今喻を以て之を説明せん予の圖より神が憐れみ言語を人間に教へたりと斷言するには非ず即ち教へしやも困難しといふのみ今道理上より考察を下し神が吾々人類に言語を教へたりと見做し尙ほ一步を進

めて考へ見るに神其神たる所以も亦吾々に教へざるの理なし其若し人間と交通することを得ば必ず相當の方便を以て之と交通することあるべし神は即ち蟻と蜂とに教へて冬の爲に豫備なましむるの神なれば豈人に教へて永遠の爲に豫備せしめざらんや又神は漸を追ふて真理を教示し亦初めは二三の人に教示せるを常とす之れ世界開闢より殆んど六千年の久しきを歴て初めて磁石の用を知り印刷の業開け天文の實相現われ蒸氣電氣の効用を發明せり而して其初め僅に二三の人にのみ知らるゝも終に世界一般の便益に供するに至る斯て神が宗教に關し其意旨を人間に示すも亦其初め之を二三の達人に示し施て他人に及ぼし漸々全地に周ねからしむ蓋し神は古今同一の法に由て其行爲を顯しす者なればあり

第二 聖書は即ち神の默示なる事

前段の論より起る所の問題に即ち「聖書は神の默示ありと信認するは何等の點に在るや」と云ふとなり此事に就きてハ默示説を非とする論者様々の妄説を以て抗抵を試みたりと雖後に示す所の夥多の証據に依て聖書の神著神典なることは明かに辨解することを得べし

奇跡論之部

第一 基督は奇跡を行ふたる事

初め見るべき眼を人に興へし神豈盲人の眼を醫するの能力なき理あらんや初め人に生命を興へし神豈死者を復活せしむるを得ざるの理あらんや奇跡の存在は何人も之を拒むこと能ひざる然り而して神此の人類を訓導せしが爲特に派遣せし人にして自其神道の使者あることを明かす顯ゆすの手段を用ふること能はざるの理あらんや此に由て之を視れば奇跡を信する者は即ち愚なりと言ふも亦不可あり

ヒユーム氏曾て「奇跡は經驗に反す」と述べたり然るに其意若し奇跡は今日の我等が經驗上に於てあることありしと云ふに在りとせば其説正しと雖昔時基督生存の際だも人の經驗せしことありしと云ふの意あらばヒユーム氏は全く其説を取消するを得ざるべし何とあるれば基督

生存中に際會せし人々は自ら其奇跡を實驗せしことを保証し數千の  
 人々其公平正直の心を以て之れが保証者となり爲に敵人の窘迫を被  
 むり従容として死に就きたることありしを以て知るべければあり扱  
 て其保証者たるや智慧不充なる人に非ず且奇跡を實驗するの幸機  
 會は遭遇し又其性質の正直と謂ひ品行の廉潔と謂ひ實は此より慥な  
 る保証者の復決して在ることあかるべし古來未だ曾て其保証を不充  
 分ありと認むるもの亦此より善き保証者を現出せしめたるもの  
 もなし加之上帝の能力は奇跡を行ふに足らずとの説をなす者の未だ  
 曾て之れあらざるなり夫れ全能者の能く萬物を進退せしむることを  
 得べし物一として上帝の左右すること能はざる者あり然れども爰に  
 唯一の疑問あり曰く上帝は時として奇跡を行はんと欲するの意あり  
 や否や答て曰く其奇跡を行はんと欲するの意あるやなきやハ上帝が

此世を主宰するの行と事とに由て明かに知るへし一古賢曾て萬物不  
 動の説を主張せり時に其反對論者は言論を以て之を駁撃すること  
 好まず即ち故に起て室内に徘徊せしかば不動論者の黙々として敢て  
 答ふること能はざりしとぞ斯の如く若し人あり神の奇跡異能を拒ぎ  
 否まんと欲すと雖眼前現はる、所の奇跡を見且つ其異能の實跡を記  
 したる録事を見れば疑念正に消失すべきは當然なり蓋し事實の跡は之  
 を外より我に入れんと欲せば唯二種の方々に依て之をなし得べきの  
 一第一直接又我が耳目に觸る、ことと由て爲し得べし第二他人の保  
 証に由て爲し得べし

基督教の眞理を証明せんが爲し行はれたる奇跡は大抵初發該教を弘  
 びる際に於て行はれたり設今日に至るまで未だ曾て奇跡を行はざり  
 しからば我々一代以往の人々は悉く福音の眞理に就きて充分の証據

を見たる者なかりしあるべし之に反して設奇跡古より始まり今に至るまで尙ほ止む時なく常に續きて行はれ且つ人として奇跡を見ざる者あるが如くに夥しく行はれたらんには之を見る者或は其奇跡なることを疑ひ日常普通の定理なりと考へて全く感ぜざる所なかるべし斯て邪曲の徒は之を以て充分の証據と爲さず唯日々其奇怪な驚き且つ恐怖を惹起して多少思想の自由を妨害するに至るべし然らば則ち昔時奇跡を實驗せし保証者の証據こそ實に聖書の眞理を証するも最も穩當なりと謂ふべけれ又基督が奇跡を行ひしあとを當時の人民が信用せしことは少しく腦髓を有つ人ならば未だ曾て疑を入れざる所なり敵にまれ身方にまれ皆其然ることを認す基督の十二門徒も大に其然ることを保証せり基督若し斯の如く其奇跡を信ぜしむるに於ては果して實際之を行ひたるか若しく之を行ふ爲して人民を欺きたる

かの二點は在るべし

若し夫れ基督の則ち人民を欺きたる者とせば斯の如き不思議なる人物は古今未だ曾て有らざるべし何となれば其性質決して人を欺く等の邪念ある人に非ずペーリオン又はヂエフェルソンの如き熱心なる不信者と雖耶穌基督の仁且つ義ある人物ありしことは承認せる程なればなり扱て耶穌の如く眞の善人にして欺騙を行なふ人にあらずと爲ば即ち信實篤行の人にして言行相反する等のこと毫もあるまとなかりし論せずして明なり然り而して基督は數々其奇跡の能力を自ら己れに歸せり

抑吾輩が所謂奇跡なるものを基督自ら現に行ひしことは基督教の反對黨も能く之を許諾す之を目撃せし所の猶太人も其然ることを許諾せり但し猶太人は其奇跡を以て魔法なりと爲せしのみ

（接するに吾輩府の世に在て



も天下一般其奇跡あることを許(許)不信黨の元祖セルサスも其奇跡を許諾せり然れども之を以て幻術の一種と見做したり第二の不信者ボルフリーも亦奇跡ありとの断言せず唯云ふ聖書は自語相違の所多しと第四世紀に當て羅馬國にチユリヤンと云へる帝王ありしが其人の元來基督教を信し後に至り其主義を變じて甚しく之に反對せり予思ふに基督教を敵して之に妨害を加へんことを試みしもの未だ曾て此の人に勝る者なく亦此の人に及ぶ者なし蓋し其の教に抗するや己れの權を揮ひ力を盡して其大なる帝國の信徒を殘酷非道に窘迫せり然れども其の駁教論に於て決して基督の奇跡を指て虚妄なりと云へる所あるを見ず反て奇跡の行はれたることを論ぜり其の言に曰く彼の(指)風を退け海上に徒歩し跛者聾者を醫せり云々又紀元凡そ六十年の頃に當て猶太國にヨセフアスと云へる人あり此人猶太國史一部を

編輯せり其第十八卷第三章の三節に云く當時(此歴史の編輯ある)耶穌といへる人生れしか神にあらざりしならば智者とも云ふべしその此人夥多の不思議なるわざをなし喜悅をもて眞理をうけける、者の教導者なりけりと此の文句は今日現に藏する所のヨセフアスの書中に在り夫れ基督教の眞理を証明せんがために行はれたる奇跡は基督教又ハ門徒の生存せし以來の書籍に於て其事跡の全く虚にして信あることを述べたる者あり但し其の奇跡の眞に行はれたるあとを信認するも其の神跡あることを信用せず即ち魔術の然らしむる所なりと云者ありしのみ

又直接に基督に従ひし門徒獨り其の奇跡を信じて疑はざりしのみならず尙ほ其の仇敵すら且つ之を目撃して仰天黙止し或は切齒扼腕するものあり又仇敵或ハ其の奇跡を見て己が心を變じ悔改して基督

の徒となり自ら眞理と悟りたる教を拒みて世人の虚譽を得んよまは  
 衆之を信じ甘んじて死すること樂しけれと決心する者幾千万の多き  
 よ至れり又リッテンハウスと云へる田舎漢が考へたる如く凡て基督  
 の奇跡ハ慈悲仁愛の精神より出ざるものあり而して其奇跡たるや獨  
 り夜中にのま行はれしに非ず大抵皎々たる晝間家屋の外にて行はれ  
 たるもの多し又信従者の眼前に於てのみ之を行はずして意地悪き狡  
 猾ある仇敵の眼前に於て之を行へり故に人之を強ひて欺騙の行爲な  
 りとなさんことを企つるも決して得可らざるなり蓋し欺騙の手術を  
 行ふ者未だ曾て能く醫者の目を醫し跛者をして善く歩み走らしめ或  
 ハ死者をして復活せしめたること無ければなり

第二 奇跡を以て默示を証する事

奇跡果して行われたること有りとは許認するや直に此の問題起るべし

曰く奇跡を以て神の默示たる証據となす其故何ぞや答へて曰く其の  
 故を説明すべき論理二様あり此に服すること能はざる者は彼も服せ  
 ざるを得ざるへし其論理の第一は即ち神の外能く奇跡を行ひ得る者  
 なしと假定する事其の第二は即ち神は誠を愛し眞理を好むが故に奇  
 跡異能を以て邪道を設け虚妄を立つる等の事は決してあらずと假定  
 する事なりん若し天地萬物の定則を創成せし神が其の力を用ひずし  
 て天地萬物の定則を變動し得へき者ありと信じ若くハ善良信實にし  
 て慈愛深き神の人間を欺かんとて其の定則を變動することわりと信  
 ずるを得るが如きハ未だ全く基督教を証へべき論理を解するの力無  
 きものなり此の如く人の先づ天然教の道理を研究すること適當なれ  
 蓋し天然教に於ても上帝が此人類を愛するの証據を夥しく顯はれた  
 れば奇り扱て奇跡の事よ就てニコデモ自己の感覺を述べつ、耶穌よ

謂て曰く夫子我儕知三爾爲二由神而來之師蓋稱所行此諸奇跡倘神不倍  
之無二人能行焉(約翰傳三)と此の論獨リニコデモの感覺より生ずる所に  
非ず人皆當に此感覺を有つべきなり

第三 回々教祖の奇跡の事

或曰く回々教祖モハメツトハ奇跡を行ひ以て其偽教を開けりと言曰  
く否々モハメツトハ決して之を爲せしこと無し其説く所に據れん天  
帝既よ衆多の預言者及び耶穌基督をして充分の奇跡を行はしめ且つ  
之をして人民を教導せしめたりと云ひ自ら之を行ふたりと言ひす  
モハメツト若し基督及び預言者の説く所に從ひて其の教を立たらん  
に其の所説は正論ありと雖惜哉彼の異端の道を開けりモハメツト  
實は「格闘」(回々教)あるものは奇跡に依て現出せりと説きたることあ  
るも是れ全く其教法を自讃したる文章の勢にして確乎たる論よあり

らざるなり若し人其の文章を見て實に斯の如き事實ありしと信ずる  
を得ば吾輩は「格闘」よりも尙ほ一層文勢を強うせる彼のホームルが著  
作に係る「イリヤツド」ミルトンが著作に係る「パラダイスロスト」を提出  
して以て其の信用を挫かんと欲す蓋し此の二家の著書は「格闘」に比す  
れば遙に優る所あるも未だ之を以て奇跡と爲す者あるを聞かざれば  
あり抑モハメツトが教法の大論理の則ち識者の熟知する如く奇跡を  
以て之を立つるにわらず劍に頼て之を弘むるの一點は在り惟ふに彼  
が一生の履歴の則ち其の然る所以の証據あり

第四 天主教の奇跡の事

昔時昧昧の世に於て最も甚しく亦近世に於ても數々行はれたる彼の  
天主教の奇跡の全く該教の教師等が其の信徒の無智愚闇なるに乗じ  
種々の方便を以て恰も奇跡の如くに見せしめたるものにて決して確

實なる証據なし其の奇跡ハ大抵秘密なる所歟若クハ既に妄信を起して該教ヲ服従せし人々の目前に於てのみ之を行へり亦或は唯一の奇跡を行ふんがために數年を費すあり或ハ奇跡成就と唱へて之を衆人に目撃せしむるよ至て見る者其不充分なるを以て疑惑を抱く者ありきギボン其の他の不信者が奇跡は偽なりと痛論せしは蓋し此等の奇跡を以て其の論の基本とあせるあり

預言論の部

第一 預言は默示の徴據となる事

聖書は預言あるを以て神の默示あることを証するは奇跡を以て証するも異なることなし其の故何ぞや曰く甲乙二様の論理を以て之を明かにすべし甲ハ即ち先知力は獨神にのみ屬する事乙は即ち神が人類の將來の事を示すは之をして迷惑と陥らしめんと欲して之を爲すは非ざる事此の甲乙の道理は両方から採らざるを得ざるべし而して此の道理を採るに至ては先づ聖書の預言を心に味はひ之を預言せし者は則ち自ら預言せしよ非ず神其の預言者よ憑て之を預言せしものあるよとを承知せざる可らず爰よ人あり未來に於て將に起らんとするの事實を預言す斯て此の預言若し毫厘も違ふことなく盡く應驗あるに於ては之を預言せし預言者ハ果して其の事實を先知せし人なる

べし然り而して若し其の預言者己れが先知せしことを自ら誇らず亦其の能力を獨り上帝に歸し自己の能力に非ざることを自ら保証するときは上帝即ち其の人に憑て預言せしめと明なり

抑世に非凡の先見力を有する人少きにあらざれども彼の先見力なるものは神靈に感じて先知するを全く別あり例之ばカンニンク氏は甚だ先見方に富みし人なりしがウエーグーの戦争後未だ久しからず人に告て曰く歐羅巴に於て起るべしと此の言果して違はず數年の後に至て應驗ありき然れどもカンニンク氏固より神靈に感じて以て先言せしにはあらず時勢の景況を察し古今の事情を推して此に其の考を及ぼせしのみ一千八百二十六年此人復英領印度の奴隸事件に就て預言せしも遂に其の言應ぜず甚だ異りたる結果を生ぜり氏若し其の先言の能力を以て自ら神靈に感じたりと爲したらんにハ斯る場合に

に當て悉くは偽預言者の名を免るゝこと能はざりしならむ故に予カニンク氏の預言者にあらずと斷言するも亦自ら己れを預言者とは思はざりき

聖書中預言の數甚だ多し而して其預言たるや絶て曖昧の言を記載せず時の如何所の如何人の如何に至るまで一々明かに之を記載せり

第二 世界萬國に關する預言の事

聖書中世界萬國に關したる預言を記載せり即ち萬國の形勢將如何に成らんとぞむること及び其の境界の大小其の他些細の事に至るまで之を預言せり其の應驗は實に灼しく人をして驚かしむるに足る若しロルソン氏の古史を讀て聖書預言の眞理に感服せざる者あらば其の人の誠に頑固の不信者あるべし

第三 西拉斯(帝王)に關する預言の事

或る預言は一己人又は一の場所と關すシラスバ比倫を掠むることに付ての預言は其の事實のあまじ二百年前之を記載せり其の預言の人名に至るまで明かに之れを言ひ且つ其の城を拔く時の景況及び之が防禦の手段等に至るまで一々洩すことなし又猶太國の虜囚が本國に歸るべき定命ありしことも詳に預言せられたり

第四 ツロ(Tyre)に關する預言の事

扱て預言者以西結の時代に於てはツロの如く富榮を極めし都會はあらざりしに預言者以西結は神靈に感じて預言して曰く使<sup>ツレ</sup>之爲禿髻焉其必爲<sup>ツレ</sup>海中張網之處云々(以西結二十六章四)ツロ其他<sup>ツレ</sup>少ホルニ一等の繁華は數百年にして衰微し其の預言に違はず魚を乾かし網を干すの所とはなれり

第五 亞拉比亞人に關する預言の事

以實馬利の子孫なる亞拉比亞人に關する預言を其預言せし時より三千年餘の久しきを歴たる今日の吾輩が現に其灼しき應驗を見る所なり(創世記十六章)其の人民尙<sup>ツレ</sup>野蠻の有様<sup>ツレ</sup>に在り之と開化し之を文明にせんがために盡力するもの甚だ多きにも拘<sup>ツレ</sup>らず尙<sup>ツレ</sup>や其の手<sup>ツレ</sup>衆を拒み衆の手<sup>ツレ</sup>亦之を拒む尙<sup>ツレ</sup>は諸兄弟の東に居るなり

第六 基督に關する預言の事

救世主基督に關する預言は先づ其不可思議ある懐胎に依て生るべき事又其の誕辰の時と所を明かにし其の性質其の奇跡其の教理其猶太人より疾まる、事其の死の有様其の復活の事等に至るまで一々明細よ之を記載するはあし而して其預言都て全く應し基督が死に臨みて其の仇敵之を輕んぜし言語動作及び被刑者の衣服を闔みて分ちし等は其の事實預言と毫も異なること無し

第七 耶路撒冷に關する預言の事

救世主基督が耶路撒冷の事ヲ預言せしハ當時の人の未だ全く死し盡さざる前に應驗あるべしと（馬太傳二十四章）云ひ置きしが果して其の時代に亡びたり又其の滅亡の時に當て必ず大難あり云々（馬太傳二十一節を）預言せしはヨセファスが録せし所の其滅亡の記録とを讀合する者は基督如何にして斯く委しく將來の物事を先知したるやを驚かさるものなし扱て耶路撒冷は基督が預言せしと毫も異なることなく大凡千八百年の間大難の有様在りし嗚呼此大城にして此の大難ある天なる哉

第八 猶太人に關する預言の事

又神會て預言者に憑て猶太人の將に離散して哀れなる苦しき有様に陥らんとすることを先言したりしが猶太人は現に今吾輩が目撃する

如く數百千有餘年の間世界の僻陬に放たれて苦難を受け其の子孫或は宗教の爲めに幼少の時生命を失ひ今に至るまで尙や苦難の有様に在り又恰も猶太國に住居せし時と異ならず今日に至るまで一種特別の人民として未だ一國を成立せる能はざるなど予は此の預言に付きて多言を費やすを要せし今猶太人の中より一人を擧出して其の自ら言ふ所の説を此に記載す

猶太人大關利未論して曰く「モーセカ曾テ預言セシ預言ノ應驗ハ信者不信者中ノ雙隣者ナシテ仰天セシムベキ明瞭確實ナル徵証ヲ顯スナリ」と又曰く「予ハ殆ンド千八百年ノ間苦難ヲ受タル國ハ絶テアルコトナシト」斷言スルヲ恐レザルナリ」と又曰く其詳ナル所ヲ尋ヌルニ其ノ（モーセ）彼等（猶太人）ニ付テ預言セシ彼ノ刑罰ハ悉ク既ニ終レリ其應驗ノ著シキ有様ハ不信ノ徒ガ其ノ事實ヲ以テ預言以前ノ事跡ナリト

爲す預言ハ則チ事ノ成リシ後ニ記載シタルモノナリト云テ論駁シ  
ルモ蓋クニ足ラサルナリ」と云ひ其の預言と應驗の事とを概論したる  
後又云ひけるは「予實ニ之ヲ見テ感心スルノミナラズ亦非常ニ駭キ且  
ツ仰天セザルヲ得ザルナリ」と

(Defence of the Old Testament, pp. 11, 15, 16, 33.)

抑奇跡及び預言の兩柱は基督教の重力を載くものなり(按するに言こ  
ひ此の二柱に依)人苟も該教に忠せんことを欲せば當り片時も之を輕  
忽にするをなく常に保護擴張せざる可らず之に論ずる所甚だ簡略  
又して不充分なれば人若し之を詳かにせんと欲せば尙ほ詳細に論究  
したる奇跡論及び預言論等又就て深く研究すべし

雜註之部

第一 聖書文章の事

右論と來りし証據の外尙ほ種々の細微なる証據あり第一神典の文章  
は高尚にして純粹且つ公平にして偏僻なく加ふるに首尾一徹其の目  
的を異にせざるは他の及ぶ所よあらざるなり今之を詳論せんと欲す  
れども此の小冊子に於て之を爲す能はず予今世界に於て最も識力あ  
り最も智慧ある有名の諸學者が聖書の文章を見て如何なる感覺を起  
せしや少しく之を陳せん

夫れアイザックニウトンハ其の學び得し所の學術の方に依て太陽及び  
數多の遊星の周圍と距離とを知りたる後坐して聖書を研究するに當  
り左の一言を吐けり曰く吾輩神典の最も高尚なる哲學の部に入る、  
なりと



チヨンソン氏ミルトンノ詩を評して曰く此の大作の最初ならざる故  
 を以て最大と云ふ可らずと又曰く歌の歌(聖書の詩)に比す可きも  
 のなしと  
 此等の言を引て以て聖書文章の優れて比すべきものなきことを証せ  
 んど欲せば大部の書と離れ盡すこと能はざるへし抑聖書のローク  
 氏が曾て云ひし如く實に上帝親ら之を著述し靈魂の救を以て目的と  
 爲し純粹にして過失なき眞理を以て其の材料となせしものなり  
 第二 聖書は人品を改良する事  
 扱て聖書を信じて讀む者は其の心一様の好結果を生ず其の心の優  
 れて潔白なる其一なり聖書は云く「エホバノ律法ハ精神ヲ化ス」と此の  
 結果ハ性質邪惡少なき人間にのみ生ざるのみならず尙ほ亦極惡粗暴  
 の滅法人を離其の能力に依て善に歸へるよきを得るなり人曾て野獸

の如く猛に死毒の如く残忍に暴風の如く亂なりと雖聖書のカは感化  
 せられて純朴となりしもの少なしとせず是を古より然り古代の信者  
 が曾て記したる書に曰く殺氣を生ずるの速にして與に親んじ難き剛  
 情なる性質の人を予は携へ來れ予は二三の神語を以て之を羔の如く  
 溫柔ならしめん貪慾深く吞齋強き惡漢を予に携へ來れ予は之に教へ  
 て其の貪慾を離れしめ手を舒げて金錢を喜捨せしむべし残忍無道に  
 して人を殺すまを嗜む所の人面獸心なる者と予に携へ來れ其の惡  
 虐俄に變じて温厚の人とならん不義不正よして頑愚濁惡よ沈溺せる  
 人を手に携へ來れ其の人直ちに信實にして道理に明かなる清潔の品  
 行を顯はすへし(Lactantius, Inst., liber 1, caput 26.)  
 聖書の人心に貫徹する古今猶斯の如し故に完全無缺の教會史ハ其の  
 録する所大概聖書の教理に依て人品改良の實効ありし事實のみなる

べし此の實効は他の修身書と等しき有様に顯れる、に非ず例之バ  
 之ロハ能辨にして勉強家なりしが其の著りせし書よ於て神の性質及  
 び人の道を説けり然れともシセロの書に依て惡人其惡路より離れ化  
 して善良の人となりしことハ未だ歴史に於て見しものなし獨聖書と  
 聖書の真理に就て論したる書のみ此驚くべき能力を有するなり  
 抑常人の心の怡も是の如く言て止まざるに似たり曰く「保羅は我既よ  
 知る所なり耶穌も我が知る所なり或は其の教の力を覺ゆ然れども理  
 學哲學及び美麗なる詩歌と強き能辨を揮て予に來る所の爾は何人ぞ  
 や予は爾を譽むることも有る可けれと爾が教に感服せる等は決して  
 予が欲せざる所なり」と夫れ斯の如き經典若し神より出るゝ非ずして  
 何ぞや

第三 聖書は人心を慰むる事

基督教の他教より優れて秀たる証據ハ又愁傷の心を慰むるの効能あ  
 る事なり他の法門就中無神論理の法門は實に無慈悲にして酸味且つ  
 心を慰むるに足るべきものなし唯基督教は否らず心を和げ元氣を養  
 ひ活潑の精心を振起す其の教ふる所の言は獨我をして耐忍せしむる  
 のとならず己れに克て餘力あらしむ唯小事の困難に於てのみ然るゝ  
 非ず生命に關する大困難に於ても亦甘じて其の辛苦を嘗め且つ之を  
 吞むことを得へし今之を証せんがため適切な事實を擧て以て左の二  
 段に掲げんとす

第四 シホルテ一及びハリホルトン比較の事

予爰に無神論者の巨魁とも稱すへき某の感覺及び謙遜よして信心深  
 き上帝の忠僕とも稱すへき某が感覺を比較すべし  
 シホルテ一曰く滅亡破壊に外ならざる此の全世界を顧みて恐怖せざ

るを得る者の何人ぞや大地は則ち全く怪異を以て成れるものなり又  
 全く死傷を以て掩へる處なり是れ恰も殺害及び疫患の蔓延せる大原  
 の如く土水風の三界に住する各種の動物は皆互に驅逐し互に捕獲し  
 て或は裂き或は噛み相憐む所なし人類の禍の尙ほ是よりも甚だしく  
 各種の動物が受る所の禍を合併して一時に之を受るに似たり人皆生  
 命を愛せざる者なし然れども吾人當に早晚死すべきは自ら知る所な  
 り人暫時の福樂を得んと欲せば必ず當に先づ種々の困苦を歴ざる可  
 らず而して後終り死して蛆虫の食となる人自ら能く之を知るなり之  
 を知るの禍特に人間に在り他の動物の斯る禍なし人間瞬時の生存も  
 各患難に於て經歷す或は金錢のために同族の咽喉を刺し或は騙し或  
 は騙さる或は奪ひ或は奪われ或は人を制せんと欲して人に制せらる  
 ることを甘んじ終に其の自ら爲せしことを悔悟するものあり實に人

類は宛然罪を同らし禍を同らす所の罪囚の群の如し實に大地の人  
 類の居る處に非ずして人類の尸のみ在る處と謂て可なり予は此の恐  
 るべき景况を察して戦々慄々たり而して予は天道の是なるを非なる  
 かを疑はざるを得ず嗚呼願はくり予曾て生れしあとあらざりしこと  
 を是則ち彼の王侯に敬せられ諸民に尊ばれし大家が罷黜せし遺言  
 にして其の主眼は則ち嗚呼願はくり予曾て生れしあとあらざりしこと  
 をと云ひし結末の一句に在り  
 今眼を轉じてハルホルトンを視よ氏は性善良にして厚く造物者に  
 事へ又造物者の命令を守るあとを好み氏曾て痛苦の中より在りし時  
 人に謂て曰く予は暫時にして上帝を見んこと昔日に異なるを得べく  
 且つ永遠無窮上帝を讚美するの身と爲るを得たり夫れ上帝が肉体を  
 取て降生せしあとを思ふ時は予誠に嬉しく且つ心地よし斯る恩愛に

沐浴せし身を以て愈之を愛敬し彌之を頌讚せざるは何の故ならん  
 予自ら己れが心を怪しむなり予斯る肉体の甚き痛苦と臨終の期既  
 に近きにも拘らず斯く平穩なるは豈驚くべきに非ずや願ふに予にし  
 て斯る大恩恵を靈魂の上に蒙るは夫れ如何なる大慈悲ぞや予は其の  
 救を望み上帝を誦り且つ死するも尙や歡喜あるを得るが故に上帝の  
 名を讚美して止まざるなり嗚呼予が生れたりし誠よ大幸福と云ふ  
 へし嗚呼願くは予上帝の在まを所ま住せんことを抑予の父母あり又  
 兄弟十人あり悉く天國に住す予此を遊れば則ち兄弟十一人となるへ  
 し今上帝の予に遇する斯の如く厚く又斯の如き榮光を與へ玉ふに於  
 ては玉座の側に於て神羔(耶穌を)に見ゆる其の榮光幾多ぞや嗚呼予が  
 生れたりしは誠よ大幸福と云ふへし」と扱て以上述べたる處の言は盲眼  
 の徒と聖之を見るときは容易く是非を辨別し得べき善人と悪人を並

べ神教を奉ずる者と之を憎む者とを比べたるものなり

第五 保羅及びギッポン比較の事

復此に二種の人物を擧て互に比較せんとす甲は即ち史學家なるギッ  
 ポンなり乙は即ち使徒保羅なる甲乙兩ながら有力の士にして兩なが  
 ら膽力剛氣の煥なる人なり其の著書兩ながら後世に傳はり人の尙び  
 讀む所にして久しく公衆の耳目を驚かせたり其の年齢も雙方殆んど  
 長短なく死するに臨んで兩ながら遺書を以て各其の精神を述べたり  
 ギッポンが自記の傳に曰く現在に即ち唯是一念なり過去は既に去て  
 在ることなし吾輩の未來は開くして疑はしく今日死するやも計り難  
 し夫れ假定の法則は大概違ふことなし若し或は其の法則變ずること  
 あるも予は尙や十有五年の間生命を保たんとことを假定せり予將に彼  
 の長壽を以て人間の至樂となせし聰明なるフンテナル氏が持論と經

職とに依て擇び定めし所の事を自ら経験せんとす夫は彼のペフホ  
 と云へる雄辨なる博物學者も既に同意を表せり蓋しハフホンは高壽  
 を以て人間道徳上の大なる快樂となせり其の故何となれば情慾此に  
 至て衰へ責任此に至て盡き功名此に至て成り運機此に至て確定する  
 ものなればなり此の長壽の樂はゾホルターヒエーム其の他の學者を  
 以て摸範となすべし予が如きは夫に其の論を賛成するものあり予は  
 固より精心又肉体の未だ熟することなくして朽ちばつること按ずる  
 せずして死すを好まざるなり然れども時未だ満たずして滅じ望未だ  
 成らずして亡ぶの二事の現世の免かる、ことを得ざる所なり予の之  
 を實驗するごとよ心慘然として鬱雲頻りに起り生命の夕暮をして暗  
 黒あらしめんとす」と斯く記せしは即ち彼の有名ある羅馬帝國衰頽録  
 の著家なり氏は此言を陳べし後未だ三四月を経ずして濫焉此世を逝

れり又長壽の樂に就きてゾホルターを提出したきもゾホルターが事  
 は既に前よ述べたる如く嗚呼願くば予曾て生れしことあらざらむと  
 ぞ」と云ひしを見れば實に樂なき人物なりしこと明けし  
 今保羅が將に終に臨まんとせしとき言ひし詞を聽くべし曰く我逝日  
 伊邇。我已戰善戰。已盡我馳驟之程。已守信之理。而今而後有義之冕。  
 爲我備。主即公義之審判者。於乃日必以之賜我。不獨賜我。我亦  
 賜於凡。彼之顯著者。（六節乃至八節）不信者之患難の時に當て恰  
 も茅蘆の暴風も動搖せらるゝが如く決して慰を取る所なし唯大神エ  
 ホハの活法に頼む者ハ否らず戀愛の波濤之を沈溺せしめんと欲する  
 も確乎として動くまゝとし其の有様猶左よ掲ぐる歌の文句の如し  
 あしびきの山の崖に。ぬき出る巖の姿。ながむれば。風も嵐も。あどがへり。  
 ふるひわななき。走るなり。我しからじと。雲霧は胸のまをりに。むらがり

てうちかこめども。峰のなほ。みそらの光仰ぎつゝ。いつも楽しく見へにけるかな

第六 時代の経過を以て証據益判然とる事

基督教の確實なる証據は時代の經歷するに從ひ其の功力を減少すること無く反て益増倍するものなり凡そ悔改して教に從ひし者凡そ信仰して安心を得たる者凡そ信心厚くして患難勞苦に堪え得たる者凡そ各宗派に於て漸く發明する所の福音の効及び預言の應驗等は皆天下歴々の士が既に其の心に銘して感服したる程の充分なる証據なるも尙ほ歲月を積むに從ひ倍其の証據の力は増加するものあり是を以て義の大陽(指す)基督を諸天の上に昇りて一千年の間全世界を御し光明恩愛及び贖救の福澤を蒙らしむるの時代(按ずる)聖書に見ゆたり(預言)に至れば神典を信すべきの証據は充満して餘あるべし

辨駁之部

第一 天文学を以て基督教を駁するを辨す

世間學術を以て神典の教理を駁撃せんことを試みるものあきにあらず今少しく之を論辨するも無益にはあらざるべし或曰く當今學術進歩し特に天文の學開けしより太陽の如きは日々東方より出で西方よ没するが如く見ゆと雖實は地球の運轉に依て斯く見ゆるのみ然るに聖書は學術と相反し日出日没等の語を以て記載せる所ありと予曰く聖書の固より學術を論するの書に非ず故に之に記載せる語辭ハ則ち平常人間の普通に用ふる所のものなり若し夫れ斯る普通の語辭文句を除きて全く用ひざるに至てはニウトン其他の天文學者と雖亦信用を失ひしあるべし若し之に反し聖書中天文に關する事ハ悉く學術の語辭を以て記載したらんには既に天文の理を誤りし昔時の學者は

必ず基督教を以て虚妄と爲すか將た自己の信用し來れる學術を虚妄  
 ありとして捨てざるを得ざりしならむ然るに聖書は天文學派の如何  
 否是非とするの經典にあらず唯宗教道德に關し天意人道の在る所を教  
 ふるの經典なり然りと雖聖書中或は現今吾輩が學ぶ所の天文學と符  
 節を合するが如き語句無きにしも非らず蓋し舊約書に云ひずや「其レ  
 (天帝ヲ)北極ヲ空際ニ陳シ地ヲ無物ノ間ニ懸ク云々」(約百記二十)と  
 或曰く聖書を研究する者若し近世の天文を學ばざれば天地造成の廣  
 大なる事蹟を解し得可らずと其の説或は然らん然れども人假令聖書  
 のみ研究して更に天文を學ぶことあるも天地造成の廣大ある事蹟は  
 亦明かよして且つ夥しく聖書に記載せられたり其の之を記載せる体  
 裁は恰も其記録者預じゆ學術の進歩を洞察し後世の人の將に發明せ  
 んとする所の事を先知して之を録せしもの、如く誠も高尚ある語辭

を以て之を記載せり而して其の載する所の事實は現今吾輩が學ぶ所  
 の學術と毫も反對齟齬する所あり但し聖書の目的は天文美術化學等  
 の學科を教ふるに在るに非ずと知るべきは勿論なり  
 或人又以爲らく近世の天文學に據て觀察を下せば此の地球の外尙ほ  
 幾多の世界ありて衆生之に棲息すること明かあり然るに救の道は獨  
 り此の地球に居居せる人間のみに及びて絶て他の無數世界の衆生に  
 關するよしなきは誠に上帝の慈愛未だ厚しとするに足らざるが如し  
 從て亦上帝と稱するに足らざるが如しと予曰く他の遊星に於て衆生  
 の棲息とこの説は全く此の地球を推して想像したるものなれば其の  
 説未だ果して當を得たりと云ふべきにもあらず且つ決して永久變ず  
 可らざる確説にもあらずなるなり假令非常の變動ありて聖書の説を敗  
 るあるも又ハ無數無量の衆生天體の上に棲息するの説敗を取るも智

者は敢て感ふ所なし况んや聖書の説を敗るべき變動の如き到底あることなきをや近頃天體を實驗する人々の説に據れば月體も於て動物の棲息する事實に決してあることなきが如し然らば他の世界に於ても亦動物の棲息する處なきやも知る可らず然り而して天文學の主旨は天體の實況を明かにするに止まり彼の無量世界に於て人類の繁殖する等の想像の如きは則ち推量の想像と云ふべし是れ實に空想と云ふべきにもあらず又妄想にもあらずれども推量の二字は決して免かること能はざるべし爰に人あり密柑一個を食ひて酸味甚しきを覺え而して密柑は都て酸味甚しきものなりと推量せり其の推量は實に自然に出たるものなりと雖然れども果して當れりと云ふべきはあらざるなり夫れ吾輩が確平たる真理と定りたる主義を以て満足するは真理に近き推量説を取て以て之を拘泥する輩よりも甚だ勝れる

が如し但し基督教を奉ずる者も亦道理に應當せる推量説は之を拒むことあしと知るべし  
斯く公平に論及する上は果して聖書に於て天に無數の衆生が存在することを記載するや否やを述べざるを得ず聖書に云く之は役事スルモノ千々あり其ノ前ニ侍立スル者萬々アリ(但以理七)と是れ蓋し無數無量の生活物ありて天上に存在するを謂ふも聖書に據て按ずるに天上の生活物は其造成せらるゝ事人類よりも先なるが如し然れども人類造成の時より幾何の先も造成せられたりしものは未だ詳にし難し又考ふるに其の或る種族は人類の如く罪を上帝に獲たるが如し蓋し人類の罪惡は上帝の慈愛に依て免かるべき妙法あるも天族の罪に決して免かるべき方便なきが如し此に由て之を視れば上帝の慈愛は誠に至妙不可思議と謂ふべし詩篇に云く耶和華我儕之主歎美哉爾



名徧於天地兮、中我觀爾之天爾指所造兮、觀月與星爾所設兮、則世之人爲誰致爾念之乎、人之子爲誰致爾願之乎、爾使之遜於天使、且冠之以尊、以榮又使之治爾手之所造者、爾服萬物於其足下兮、云々（詩第八篇）  
抑罪惡は神人連絡の縛を絶斷するの具なり、然るに聖書の説く所に據れば、人基督耶穌に依て以て再び天神と連絡することを得べし、又未だ曾て罪を天神に獲しことなき、天使と既に罪の赦免を得たる人間とは特別に天神の愛顧を蒙ふり、借定住の福樂と與るを得べし、是れ我輩が決して他の學術に依て知り得べからざる至大至妙の智慧又慈悲なり（以弗所一章八節乃至十節又）  
（哥羅西一章二十節を見よ）  
夫れ基督の成績は上帝の榮光と人類の福樂のみ、大關係あるは勿論なり、と雖、尙は天上の無礙なる活族が其の成績に由て福社快樂を増加すること無し、とは聖書中に記載せし所なし、彼の無罪潔白なる天族は

固より救主の贖を要せず、と雖、基督の成績に由て上帝の榮光の最も著しく現はれ、又天族と上帝との關係及び天族相互の關係並に其他の受造物との關係も、此より由て一層親密に成りて、倍知識と榮光とを増倍するやも知る可らず

第二 地質學を以て基督教を駁するを辨と

或る淺學の士謂へらく、天地開闢の事跡及び世界大洪水の事跡、其他様々の事跡に關し、聖書と地質學とは其說相反するが如し、と予左に數條を設けて、此等の疑を辨解せん、とす

第一條 予は世の中に地質學と云へる一科の學術あることを許認せり、然れども、其の地質學なるもの、世の學者が未だ全く之を以て格物究理の道に合へりとあすものは、あらず、當時地質學に熱心する輩と雖、尙或之を以て不充分の學科と爲し、其精密ならざるを憂ふる

者無きにしるあらざるなり

第三條 時代の進歩に従ひ默示の眞理の漸々明瞭に極き終に至極の固陋なる敵對者と雖彼に服し此に従ひ其の疑團の十に八九は基督教の道理に譲り到底反する所あることなきに至るなり故よ人若し尙ほ一層地質學の眞理を充分究むるを得ば何の事跡を論ぜず必ず全く聖書に載する所と一々符合せすと云ふふとなりに至るべし

第三條 一の専門學を以て尊嚴を受たる學者社會中地質學者あるもの恐らくは事を論ずるに最も早卒にして深く考ふる所なきが如し今其の証據を擧んにパフホン氏謂はずや地球及び月體は元來彗星の突衝に依て打離され之が動力及び運動を以て月は地球を周回し地球と月とは両者から太陽の周圍を旋轉するものなりと又謂はずや熱湯の氣太陽より發出し凝て水と成り而して此の大海存せりと斯の如く其

の妄妄を加入せ毫も自ら疑ふ所なきが如く且つ絶妙の能辨を以て其の説を陳述せり抑今の學者が此等の妄語を信用せざるは讀者の能く知る所なり

第四條 夫れ地質學者の論は大概變じ易くして一定せず昨日某の主張せし所今日復某の拒絕する所とあるまじと往々之れあり是れ畢竟地質學科の未だ完全せずして議論の評ならざるに原因せるあり或る學者は地質學を以て學術の地位に列ならざるの不當なりとせし程なり但し此の事を詳細に述べんには大部の書冊を要するが故よ此に之を略す

第五條 地質學に據れば大地は今日吾人が目撃する如く甚だ遅々緩々漸を追て以て成立ち次第に進化せしもの、如し是故に或ひは進化説を以て基督教徒の信仰を論駁せる人あるも是れ實に拙劣の所爲と

云ふべし何となれば人若し物質の定則と物質の性質とは互に異なり且つ別なることを知り又天然物の定則は即ち天然物に於て神の働作する常則に外あらざることを悟ることを得ば大極に於て神が其働作を迅速にするの法則を用ひしからむ計り難き道理あることをも悟らざる可らず蓋し創造と保護とは大に異なるものなればあり惟ふに世間若し聖書微せり苟も眞の學術心ある者は天地造成其の他の事件を論ずるに當て今聖書に載する所と大に異なる所なかるべし

第六條 基督教の固より眞正の學術と一々符合せざることも無識卑怯の信徒及び淺學滅法の不信者は誤て之か反對を唱ふるあり地質學に於ても亦然り人其の學科を研究すること深きときは必ず博く天然神學の理を解することを得べし蓋し天然神學と默示神學とは彼此相合一あるものにして人苟も此を取れば決して彼を捨ること能は

ざるべし

第七條 動物の原起及び生命は無始永遠にあらざることハ地質學に由て既に詳明あり而して人類は五千又ハ六千年の古代に於て地上に存在せしことなき事實も亦地質學に據て明かに知り得べしキユーヴヒヤ一以降は絶て此等の事實を疑ふ者なく基督教を信せざる者と雖大半聖書の說に服せざるを得ざるが如し

第八條 予聖書を閱するハ亞當罪を犯せし以前動物死せしことは決して無しと記載せし所は予未だこれを見出さず亞當若し罪を犯さ、りしならば決して動物は死するに及ばざりし等の言をも未だ見當らむ唯聖書に記載せるものは亞當罪を天に獲て天祐を失ふことのみありせば彼の必ず死滅に至りしと無かりしものを云々述べたるのみ予接するに亞當若し實に罪を犯すことなかりたらんには果して動

物が死を要せざる場合も於て徒に其の生命を失ふが如きこと決して  
 明らかりしるべしと但し聖書には之をさへに記せし所なきあり  
 第九條 大地は現在の構造を全うせし遙か以前より其の實質は既  
 に造成されたりと信するも聖書は其の信用を咎むることなし扱て創  
 世記の首句に言ふ所は其以下に記せる事實よりも數百千萬年以前の  
 事實を記載したるものあるやも知る可らず古代の註釋家にして就中  
 一千四五百年の昔時に註釋を寄せし者の註釋を見るも創世記第一章  
 の首句は則ち人間造成の期よりも遙か久しき以前の事跡を載するも  
 のなりと説けり然らば斯る説明の近時の作爲説にあらざして昔時よ  
 り説き傳へたること明なり且つ此の説明は管見難題を解明するの目  
 的を以て斯く説きたるものにもあらず假令其の目的果して然るも  
 せよ當今の註釋と昔時のものと暗に符合するを見れば如何に駁撃を

試みんと欲そと雖豈得べけんや

第十條 創世記に「神六日ノ間ニ天地ヲ創造セリ」とある其の六日とは  
 即ち六期の謂にして久しき時代を指すとの説はパーキンソン  
 ヲヒヤトチエーソン等の如き諸家の主張せし所ありと雖現今の地  
 質學者の大抵此の説を取らず惟ふに其の日と云ふ一字は強に二十四  
 時間を謂ふにあらざれども之を以て數萬年の久きと爲すときは聖  
 書に於て自語相違の至難を醸すことあるべし譯者此事に付ては著者  
 とも此に故に識者は此解釋を用ふることを好まず又當今の卓越ある  
 地質學者は此解釋を以て聖書と地質學とを一致せしめんと欲するも  
 更に益ありと思へり

第十一條 地質學者は一般に地球の全面に大洪水ありしことを信用  
 するが如しキエゾヒアノ之を論じて曰く予はデルク及びドロミウを

同説にて惟よ、地質上に於て確定したる事實と云ふは先づ此の大地の平面が五六千年以前の古代に於て俄然の大沿革を經歷したる一事あるべしと

第十二條 聖書の眞理は地質學の眞理と少しも異なる所なく又反する所なき様に解釋すべきの勿論なり

前條々陳述したる所は皆地質學の一點より起りし駁論に對して辨明したるよ過ぎず若し尙ほ之を鞏固あらしめんと欲せば數多の適當なる證據を以て議論の城郭を構ふべき時間を要するあり

扱て今此に起る所の問題は即ち是より曰く人聖書を信する能はざるは果して何等の故ぞや之を約言すれば「不信仰の原因は如何」

不信仰の原因數項を擧ぐ

第一項 不良の品行は不信仰の原因となる事

諺に曰く自由生活は即ち自由思想の親ありと是れ前段の問題に答ふべき一般の答なり夫れ不良の品行の神を敬信せざるの原因にして不良の心は邪説を信するの根元なり基督教は内心に之を藏むると外行に之を顯はすとを論せず諸罪諸惡を答むるの宗旨なれば凡そ罪惡に染着したる輩は自然に基督教を抗拒するものなり是れ則ち聖書に於て明記せられたる事實あり彼得曰く季世將出二歳一誠者從己之慾而行(彼得後書三章三節二見ユ)と扱て此の誠者ハ言こゝろは不信仰と不敬心とに充ちたる輩あり從己之慾而行とは其の品行放蕩無賴なるを謂ふ仰不品行の度の各差等ありと雖到底其の不品行たるを免るゝこと能はず保羅曰く「或人ヨキ良心ヲ棄テ、信仰ヲ亡ヘリ」(提摩太前書一章十九節)とこれ罪

惡に陥り其の罪惡に因て信心を失へるを謂ふなり教祖基督或人に謂て曰く爾互相受榮不テシテ求テ獨出神而來之榮豈能信乎（約翰傳五章）と夫れ人教法を信仰せざるは自己の不品行に原因するの証據は尙ほ聖書に記載する所少しと爲す

第二項 惡樹は善菓を結ばざる事

竊ヒソカ以カれハ世間一般基督教を信せざる者の不品行は敢て咎とがむるものなしと雖基督教信徒にして品行方正ならざるものあるときは人皆直ちに驚き且つ怪あやしまざるものなし其の然る所以のものは他なし基督教徒の善行を顯あはすハ即ち該教の然らしむるものなることは衆人の既に認知するものなればなり不信者（無神論者）の風儀ふうぎハ全く之と反はんし敢て惡を咎とがむることなく放蕩淫逸ほうとういんいつをも禁いずることなく不正不實ふせいふじつをも懲戒するよし又嘉言善行を勸すすむることなく信實公義清潔仁愛等の諸

徳を尙ぶことなきなり是れ所謂荆より葡萄を採り棘より無花菓を摘むこと能はざると同一なり然れども基督教を信せざる者或は道德を尙ぶものなきにしもあらざるも是れ畢竟其の不信仰の主義に因て道德の心を生ぜしに非ず全く教育と習慣と輿論よろんとに因て然るのみ又不信者にして道德の主義を取る者は其の主義に限り之を基督教より借用したりと謂はざるを得ず是れ譬へハ他人の馬を借り或は牛を盗み由て以て己れが田を耕すに似たり予是より漸々有名なる不信者が基督教を棄絶せし原因を少しく細密に論辨せんとす

第三項 自ら無識に安じて教理を研究せざる事

彼得（耶穌の門弟子）に當時の不信者が教法を識らざるを以て自ら之に安んずるを責めたり（彼得後書三）然るに今の不信者も亦其のせめを免かる、

こと能はず如何とあれバ不信者にして宗教を辟ふする者の予未だ之を見ず彼のロエームの如きは聖書を以て自ら讀む可らざる程の恐れ多き經典なりと唱へ常々敬して遠ざくるの思を懐けりペーンは曾て聖書の全部を讀み了りしことなく某が彼の「エーヂ・オフ・リアン」の前編を著せし頃までの未だ「テスタメント」を研究せしことありしと自陳せり彼恐くの新約全書を指して「テスタメント」と云ひしならむ歟又キツホンは初め羅馬教に歸依し其の後新教に轉じ遂に不信者となりしが其の後復た新教に入しも尙ほ聖書に迂ることヒエーム及びペーン等に異なることなかりしとぞ

予史冊を閱するに或る不信者の自己の論説を強くし且つ基督教の攻撃を企つるの目的を以て深く聖書を探究せしものあり此等の輩皆終に教法の眞理を感じて自ら歸順し反て其の保護者と爲り書を著して

基督教を辨護せしもの往々少しとせず此に其の例を擧ぐんにギルペルトウニスト氏は耶穌復生論を著し大に世人の讚美を得たりロルドリックトルトン氏は保羅歸順論を述べたりしが誰ありて之を駁し得るものなかりき此の人臨終の暫時以前に當て數次聖書に掌を按しつゝ唱へて曰く「此書ニ敵對せムハモハ唯此ノ一身ノ不品行而已」と又ソアムチエニンス氏は基督教を駁すべき良方を案出せんことを企つる際反て其の宗教の眞理を考へ出し遂に新約全書の徵証論を著述したり夫れ基督教の探究を要す又其の探究の當に正直公平の心を以て之を爲さざる可らず然るも今の基督教を駁撃する輩は大概フールマン氏の忠告を用ひざるもの而已蓋し其の忠告は他にあらざらん事を書載ント欲セバ先づ多少其事ヲ購ヲアル可ラズ」となり

第四項 不信者の一般に氣質不良なる事

凡そ宗教上に關し自己の不良なる氣質に任ずる者は必ず生涯道を信ずる能はずシ一シル曰く不信者の其の氣質粗暴猛烈にして殘酷なる者多し謹慎篤實の如きは絶て有ることみし彼の輩は即ち地上の狂亂者なりと又或詩家會てペーソンの著せし「エーヂ、オフ、リーアソン」を讀ま左の歌を作れり

年にまらせて神をばそしり

理論のはしに誹謗をまじへ

おのが好まぬ文句にハ

殊にまぢきをそ、けけり

扱て宗教は對し非常の輕蔑をなすは不信者流の常習なりヂエフェルソン氏の如き法律あり自由なり政事なり此等の事を論ずるに當て誠に溫柔謹慎にして其の文章巧みに議論高尚なりしも獨り宗教を論ず

るよ至ては毎に傲慢と殺氣とを含み之を筆端に制すること能はざりき其の著書を讀む者は必ず其の然ることを發見すべし又不信者は基督教が己れの私慾と不品行とに對して多少抵抗する所あるを覺る甚だ不愉快を感ずるを以て務めて其の教法に逆ひ攻撃を試みるあり而して自ら之を勝つこと能はざるときは憤然復讐の氣を發し殺氣止む時なく終身宗教の仇となる者多し嗚呼不信者の根性は大概此の如き裁會て聞くペーソンの短氣の人にして數々忿怒を起し時として至微の刺劇に對して大に立腹せしありとぞ彼のゾオルターの如きも亦然り人若し之に媚ることを肯ぜざるときは忽ち怒りて之を遇するまじと恰も讐敵に於るが如し但し一己の人望を得んがためならば如何ある事をも辭することなかりしとぞ又ゾオルター倫敦に在ては有神論者社會に連りゾエルセルに在てはカールテ黨員と爲



リヤンシーに在ては基督信徒と爲りルリヤンに在ては不信者と爲れりとぞ其の不信者とありし後は基督教を憎むこと特に甚だしく友人に書翰を贈る毎に「下奴僕滅」の一句を其書末に掲げたり其意蓋し耶穌基督の名聞遂に撲滅す歸せんことを希望せしあり惟ふに二人が基督教を憎みしハ聊か怪しむに足らず如何にとなれば耶穌曰はずや「自ラ卑下スル者ハ必ス尊揚セラル」と斯く基督教は人の傲慢を罪し虚榮を咎め且つ人を憎と教を誹る者は上帝の罪人なることを宣告するものなればなり

第五項 自負の不信仰の原因とある事

自負就中學問の自負は大抵ぬ不信仰の原因と爲る然れども其の學問の正しく且つ深き者は反て自負のあるまとなしベークン曰く哲學上の知識深く且つ淺き者が其の精神を無神説に傾るハ理の當然にして

經驗の常あり然れども其の學を博くし又之を深くするときは其の精神必ず再び宗教の下に歸すべし蓋し哲學入門の初發ハ耳目口鼻に接近する所の近因ありて人心に顯るゝとき其の心若し活動せずんば之が大原因あるまを知らずして過くべし然れとも人若し其の學を深くし其原因の由て來る所と主宰の妙爲とを觀察すれば必ず或る詩人の形容せる如く無盡藏の鏈環の首環ハ即ち「ヂニヒタル」接するにキ稱此には天帝との座位に連らざる可からざるを信認すべしと譯して河なり又生理天文等の學術は殊に天帝の存在を証據しと且つ天帝の仁智能の三徳を著しくするものなりと雖動もすれば淺學者の自負に由て無神説ハ誘惑せらるゝもの少しとせず之に反し眞の學者と爲り眞の謙遜者と爲りしものは全く其の結果を倒にすベークンニウトンホイルロツタミルトンの如きは即ち其例となして可なり夫れ神に反するも

の自負より大なるの莫し故に神は自負者を疾むこと最も甚し  
 聖書に云く「神ハ驕傲者ヲ拒キ云々」(彼得前書) 五章五節 凡て其知識に誇る者は  
 其の心狭くして曲れり聖書に云く「唯神ハ恩恵ヲ自遜者ニ賜フ」と又云  
 く「溫柔ノ者ヲ導ク」(詩第二十五) と又云く「智者其智ニ誇ル宜カラズ」  
 (耶利米九章二) と扱て上に述ぶる所に付て適當の証據を得んと欲せず  
 宜しく有名なる不信者の履歴を探るべし就中ヒュームヴルターキッホ  
 ンの三氏が品行等を検査すべしヒューム或時人に謂て曰く余が墓上  
 に石碑を築きて此碑銘を刻すべし曰く  
 此は是れ俗に墳墓といふ  
 石の思考なり  
 此下に在るものは想像と思考よて  
 即ちヒュームが實相なり

右の文句を見てヒュームが哲學の如何なるものなるやを知るべし  
 第六項 奇を好むの不信仰の原因となる事  
 或は單に奇を好むを以て不信仰に傾く人有り斯る人の衣服の裝方其  
 の他百般の事に於て珍奇の態を顯はし世間の大眾と區別せられんこ  
 とを欲せり此の流儀は佛國革命の頃に當り歐米諸國に於て著しく流  
 行せり彼輩は世の高名なるゾオルターペインルソー等の如き豪傑  
 の品行に倣ふときは必ず當に彼の豪傑と等しく顯はるゝなるへしと  
 思へり勿論大胆な奇怪の說を述るとき必ず當ふ聽衆及び喝采者少が  
 らざるへし  
 パルク曰く邪說を唱へ異端を主張し以て愚夫愚婦を籠絡するの確實  
 の理論を以て眞理の審ならざる所を解明するよりも甚だ容易なりと  
 の一言ハイソクレテスが辨論の一なりと實に人間は己れ自ら敗を取

るへしとわきらめたらん時、當て他人の之に應援を加ふるものある時は直ちに自己の論理に疑惑を生し、俄然悦を發して辨士の巧なる理論に感ぜ、遂に其の説に感服するものなり。

抑真理を説明するに當てや、通常の定理と雖、簡易に言ひ盡す可らざるものあり然るを凡そ言ひ盡し難き真理は皆之を棄て、唯空理の範圍に轉入するは恰も天狗と爲て虚空に飛行せんことを企つると一般に危険の事なり。夫れ人其の生活、思念及び働作を世と同一にするを好まざる者は、怪々奇々の空理一たび己を觸れば、忽ち空理の擒となるの例甚だ多し、謹まざる可んや。

第七項 無病息災は不信仰の原因となる事

悪人は萬事の方角を左道に轉じ自ら受る所の幸福を乘じて其の惡を増長するなり。斯る輩は無病息災にして富榮を極むるに當て、忽ち不信

者即ち無神論者となる者と多し。ヤング氏の歌云く

「神なしと誇れる人のいつまでも聞き有様離れぬは身のすこやかなれバ、あそ篤き病は論よりも人を感ずる智能あり、病うくれば誰とも信をおこして大神に拜みそめなんことにぞありける」

聖書に云く「我惡人ノ平康ヲ見ル其死スル時亦縛ヲ受ルコト無ク其力堅固ナリ他人ノ如ク苦ヲ受ケス他人ノ如ク煩擾セラレス故ニ驕傲ノ心之ヲ縛スルコト索ノ如ク、中斯人戲謔ヲ以テ言ヲ發シ云々其レ天ニ口ヲ置キ其レ地ニ舌ヲ行ル云々」(詩第七十三篇ニ見ユ) 又不信ノ徒ハ典刑アルヲ恐レズ反テ之ヲ嘲笑スルコトアリ」と聖書に論せり。予思ふに不信者實に之を信せざるにあらざず之を欲せざるなり。語云く「思欲(サウ)リヌイト」ハ思念(サウデアラウ)ノ親ナリ」と蓋し此の謂ひ歟。

第八項 貪慾は不信仰の原因となる事

利を貪り詐偽を行ひ人の膏血を絞るを以て樂となす者は基督教の堅く禁戒する所あれば斯る輩が其の宗教を憎むは自然の理なり新約書に其の例を擧ぐるを見よテメトリヤス及び其他の銀工甚だ基督教の播布を嫌ひ衆人よ謂て曰く爾知吾儕因此業獲利云々又曰く我業危云々(使徒行傳十九 章廿五節以下)夫れ不義の利を貪る者は聖書の禁戒する所なりと知りつ、實地に其惡業を行ふ時は必ず心に不愉快を覺ゆ遂に其の禁戒を記録したる神典に由て身を脩むるを欲せざるに至る故に利の爲めに夫婦縁を絶ち父子居を同ふせず或は兄弟姉妹の間不和を生ずる等の行爲ある輩は大抵一般に基督教に従ふこと能はざるなり聖書に云く圖富有者陷於誘惑於羅網於多無理而有害之慾即溺人於滅亡及沈淪者也蓋好利爲萬惡之根云々(提摩太前書 第六章九節)

第九項 肉情に従ふは不信仰の原因よりなる事

基督教は凡て肉情より起る所の罪科の根を絶つべき宗教あれバ肉情よ従ふを以て至樂とあす者の必ず之を憎み且つ之よ敵するなり教祖親から門弟子に命じて曰く「己レヲ捨テ、十字架ヲ負ヘヨ」(按するには患難困と掇て肉情に従ふを以て至極となすもの豈に之を聞て遠く逃走せざるを得んやヒューム氏の己れを捨るの美德を指て僧徳と稱したりエマールソン及ペーソンは平素大酒を飲て醉狂せし人なりルーソーは世人の知る如く有力多能の士なりしも虚言を吐くと他人の物を竊取するの二癖の生涯止めざりき其の事實の彼が自録の履歴書に詳なり其の文に云く予は固より惡漢なりしが今尙や然り自ら有せんと欲する時の他人の物品と雖之を乞はずして取りたりとルーソーチユーリンに於て基督教より脱し遂に迷うて反教者と爲りたり又曾てワルレント云へる婦人に懇着して品行不正なりしとあり其の後復テ

レサと名くる婦人に通じ自ら耻る色なき或人が所謂「樂兒院」ハ爲メニ  
 盡カスル者ハ當ニ世間ノ喝采ヲ受クヘシ」この説を大に賛成するの由  
 を自陳せりルソー「ヂエチザ」に於て再び新教に歸順し自ら謂て曰  
 く宗教の説固より信するに足らずと雖國より一定の宗教なかる可らず  
 と  
 扱て姦通と竊盜といルソーの常癖なりしが或時彼卑屈も己れが  
 竊盜の罪を或る下女よ言ひ懸けたれば下女は直ちに主人の家より放  
 逐せられたることありと云ふ斯る悪行あり斯る汚行あるも曾て自ら  
 耻る色なく反て榮として曰く「世界大審判の日」當て予は天帝の靈前  
 に出で手に此書（ルソー「自録」）を携へて「嗚呼無始無終の有權者よ我  
 が一生の所行は是の如し我が思念も亦是の如し此れ我が有體の儘な  
 り今陛下の四周に無數無量の衆生を集め之を以て我が自狀を聽かし

め玉へ我が耻辱に於て驚かしめ玉へ我が苦罰を見て戰慄せしめ玉へ  
 又衆をして各己れが心の過失と迷とを我が如く信實を以て白狀せし  
 め玉へ我が品行必き品行より優る、所あるは我自ら保証するまとを  
 得るなりと謂ひんと  
 今夫れ是の如き人にして信實、公義、正直、廉潔、節度を勤め人を愛し神を  
 敬することを奨励すべき此の基督教も従ふこと能はざるは決して怪  
 しむべきにあらざるなり  
 第十項 名聞は不信仰の原因とある事  
 基督教は名聞を貪ることを制せざるにあらざ聖書に云く「爾尙ホ己ガ  
 爲メニ大事ヲ求ル乎之ヲ求ムルコト勿レ」(耶利米四十)と又云く「凡テ  
 ノ事分争或ハ虚榮ヲ以テ行フコト勿レ乃チ各宜シク謙遜ニシテ而シ  
 テ人ヲ以テ己レニ愈レリトナヌヘシ」(腓立比二)と扱てヒューム氏が

基督教を非としたりしに他に原因あるに非ず全く該教に於て名聞を貪ることを戒め溫柔謙遜及び利他の美德を勵むるの切なること白と已の意に適せざる程なりしに因れり夫れ耐忍嚴格大量大胆不動等の徳は即ち大人の徳とも稱すべしと雖人之を誤行ふときは尙も頑固に異なるなし但し其の純全なるに至ては眞に美德と稱すべきあり

昔時基督教徒が羅馬政府の窘迫と受るに際し毫も恐懼の色を顯はさず從容として死に就きたるを見て官吏は之を以て頑固となさざるものなかりしも實は頑固にわらず反て誠忠不動の美德を具備したりしなり今日の不信者が基督教徒を頑固視するも亦實に誤れりと云ふべし聖書に云く「エホバの交ル所ノ友ハ即チ之ヲ畏ル、者ナリ」(詩二十五)

彼輩ハ其親シメル者ナリ惟性ニ任スルノ人ハ神靈ノ情ヲ受ケズ(中略)且ツ之ヲ知ルコト能ハズ(哥林多前書二章十四節)又彼ハ靈ノ事ニ無知コトテ神聖

ノ事ニハ恰モ獸畜ト異ナルコトナシ云々」

第十一項 不信者ハ猥褻なる事

基督教ハ言行の不潔を禁じ淫奔を咎むる宗教なるを以て或は不信者となるものあり例之ハゾオルテ一の如きハ最も神聖ある問題を論ずる時だも尙や敢々猥褻の言語を雜へたり故に廉耻を知るの士は敢て衆人の前ま在てゾオルテ一の書を朗讀するを好まずゾオルテ一の淫慾の特ま甚しく曾て雜姦を犯せしことさへありと聞ゆ斯る人が此の宗教に歸依をること能はざりしは固より當然と云ふへし又ペーの著書にも猥褻の言語を載せたる所少からず其の甚しき部分に至ては眞面の人之を讀て他人に告るも尙は耻かしき程ある不潔の事を記載せり

第十二項 邪説を保守するは不信仰の原因となる事

或人の基督教を信ずる能はざる原因は其の著書に據て之を詳かに察するを得へし彼の哲學家を以て自ら誇れるヒューム氏は人已れの意に任せて己れの生命を捨るは其の人の權内に在りと論せり又少量の血液の其の常道を變ずる(按ずるに)を以て罪ありとなすは全く解を可らずと云へり又一書に論して曰く神命の第七誡(爾勿ニ姦淫)は男も女も全く關係なき誠なるまを保證すと抑ヒュームが自殺の淫を可とするの主義を以て友人に贈りし書翰を見る者は容易く彼が此の宗教を奉ぜざる所以を解することを得べし

ホリングブローク曰く一夫にして數婦を妻とすることを禁ずる所以のものは倫理の然らしむる所にあらず單に國法の然らしむるものありとジョンソン氏曰くチエスマーフフィールドは自身親ら俳優の業を設け娼妓の道を開けりとホブズ氏曰く土地の法律は即ち善惡の標準にし

て立法府の可決する所にあざれば宗教也之を奈何ともせず能はずと其の意は我が造物主即ち主宰も人間の政略を以て其の權力を輔佐するに非れば吾輩が言行を抑壓するの權ありとなり英國近世の不信者ヘルベルトは甚だ淫亂の人なりきゴッドウヰンは陽には淫亂を禦ぎ陰には之を行へり其の犯罪の事實は彼が自録に詳なり

第十三項 不信者は信義を貴重せざる事

聖書に曰く「凡テ謊ヲ言フ者ハ其ノ分必ス火ト硫黄トヲ以テ焚クノ抗ニ在リ」(一 章八節)と基督教は凡て口意相反し言行相背くの人を罪する事と最も甚し是れ不信者の身に取ては實に窮屈至極の規則なるべし左よ不信者の言行數件を掲げて其の口意相反し言行相背くものを示す

ゾオル委員は自分哲學字彙の編輯者に非ずと吹聴せしことを云ふ

バーは委託せり而してメムバーは其の請に應じて此の明白ある虚言を廣告したりとぞ

シヤフツブリー、コルリン、ギボンの三氏は耶穌教晩餐の禮は神の設けたる禮式なることを信せざりしも毎之を信する者と同じく此の禮典の席に列せり

不信者は信義を貴重せざるが故に迫害若くは些少の苦難を免れんがために一時自己の主義を枉ることあり英國チャールス二世の頃に當て數多の不信者外相に基督教徒の姿を爲し高聲を發して長き祈禱を唱へたり又之を爲すに當り務めて當時の風習に倣ひ其の語氣を哀れにし其の容貌を嚴肅にせり

基督教徒は其の教の眞理なることを保証せんが爲めに數百千萬の生命を捨たりと雖不信の黨は其の主義の爲め一人の身を抛つものあり

不信者にして實に偽善を脱し直實忠誠なる者未だ曾て一人のありなし其の甚しきに至ては陽に基督教を唱へて陰に之を顛覆せんことを謀る者さへなきにあらざるなり

ヘルベルト氏の基督教を以て最上の宗教と爲し聊か之を駁するの意ありと云へり(言行相違)又適當なる宗教を組織すべき原質は獨り基督教に在ると論ぜり(言行相違)

ホップス氏曰く新約全書は昔時耶穌の使徒等が生活せし時代より存し當時の人の録せしものあり其の記録者或は其の録せる所を自ら實驗せし者あり斯る人こそ實に預言者及使徒等の言行を記録せし眞正の記者なれと(口意相反)

フラウント曰く有神論に於て若し基督教の附屬せざりしあらば其の主義こそ安全なれと(口意相反)



又曰く吾輩が彼の世に至るべき旅路の普通の道路を以て最も安全なりとす而して人の良心を培養すべき肥料は有神主義に比すべきものなしと雖尚ほ基督教と偕に詩くよ於ては其の收穫の量最も豊澤あるべしと(口意相反)

トランド曰く予は新約全書の正典あることを駁するの意なし反て之を解明し之を確實にせんと欲するありと(口意相反)

シヤフツブリー曰く我ら正教の意義深長なるにも拘らず予は其の奥義を堅く信するありと(口意相反)

ユルリン氏曰く余が盡力する所のものは道德學問眞理、上帝宗教及び基督教に在りと(言行相反)

テカンダル曰く基督教の中より政略に關する事と誤謬の事實と時勢に關するまどを除去するときは其の教法最も聖にして其の教理の如

きは無量の智と仁とを具足せる上帝の意旨に外なしと(口意相反)

モルガン曰く我が教主の教は即ち物と理との基づく所なりと又曰く人當に福音の光を感謝せざる可らずと(言行相反)

チャップは不信仰の主義を述べたる書に「基督ノ眞福音」と題せり又一書に「クリスチヤニテ井ーアス、オールド、アス、ゼ、クリエーション」と大極の時代を同ふなる題名を掲げたり

尙ほ不信者の言行及び著書等よ於て詐偽不正不實の事其の幾多なるを知らずと雖甚だ煩はしきを以て今此に載せざるあり

#### 第十四項 論結

或人曰く當今の不信者の道理上に於ては皆有神主義なるも己れが心の傾け大抵異教主義にして其の現に行ふ所の品行は全く無神主義なるる如しと誠然「セント」オーガスタン曰く義を見て之を爲ざるも

のは必ず遂に義と不義とを辨別するの能力を失ふべし又其の義を爲すべき力量を有して自ら之を爲すことを欲せざる者は假令之を爲んと欲する時の來るも尙は爲すこと能はざるに至るへしと或又曰く不信者若し現に己れが心の傾く所に從て精密な道理を探究するときは必ず人は當に上帝を敬愛すべき者あることを發明せずと云ふことありしと此の言誠な當れり矣

不信仰の有る害然益なる事を論ず

第一 概論

若し吾輩が此の基督教を棄て、用ひざるに至らば不信者の何れを吾輩に與へて以て吾輩を益するを得んや如何なる善良の教訓を以て吾輩を導き以て人間の造成主保護主大恩主ある上帝を恭敬せしむるを得んや夫れ不信者の天を語るや聖書の半よだも及ばず天帝の純全ある宇宙の政事は不信者の能く知る所よ非ず又無始の永き無終の遠きは不信者の敢て語る所よ非ず彼の偶像教の聖賢すら尙や且つ人間の快樂に必用なりと認知したる事實だも不信者は敢て論ずることあし不信仰の宗旨は善惡の應報に就て黙々たるのみならず人の當り行ふべき道をさへ豫じめ示すことなくまた社會互相の義務を盡すべき法をさへ設くること無し不信仰の宗旨の人の妄信を絶除することなく反

て之を培養するあり不信仰の宗旨の過激の事を誇らしめ卑屈の人が失望せしむ又不信仰の宗旨は智者を愚とし謙遜者を賤とし傲慢者をして益敖慢からしむ不信仰の宗旨の賞罰を正しくせざるのみならず敢て之を論ずることなし又其の品行輕躁浮薄にして眞の快樂あることなく眞の望あるまどかし罪者は此の宗旨に依て赦免の道を得る能はず安心の法を見出す能はず又不信仰者の道徳に至ては吾輩が常に目撃する如く或は名譽の爲に一時注意をなして多少謙む者あき非ずと雖尙ほ時として破廉耻の甚しは悪業に陥ること少からず某社會の下等に至ては固より名譽に關せざるを以て一層甚しき不眞の結果を現すものなり

第二 証據を擧ぐ

マルレットと云へる不信者の爲に使役せられし給事某は日夜主人の

側侍りて無神主義の議論を聴聞せしが遂に其の主義に歸依するに至れり然るも其の如何なる悪業をなすも來世の應果なしと悟り究め由て以て自から利する所あらんと其の意を決して直ちに盜心を發し主人の所有なる種々の價高き物品就中高價の銀盤一個を盜み取れり扱て此の事遂に露れ嚴密の吟味を受たり其の吟味を受るや初に一言の答ふる所あらざりしも糾問の益嚴なるも堪へず遂に實事を白狀せり罪者曰予曾て數々君の傍に侍りし時君は來世のなき事と善惡の應報なき事を語れり予は之を聞て深く信じたるが故に此の盜心を發せりと主人曰く汝の言の如し然れども汝は絞首の刑罰は全く恐るゝ所なきやと時に某眼を鋭くあして主人を睨みつゝ主人よ予豈之に關せんや假令絞首の刑あるも予が最も恐懼すへき刑罰は君既に之を除去せり然らば予今何をか恐る可けんや

(按するに言て、乃の地獄の苦はなじと定まりたる以上は何も恐

るべきことと答へたり初て純粹なる不信仰の主義は百方之を擴張せんと欲するも遂に敗れざることをしロベルト、カール、マウエンが設立せし調和會なるものもクーバルが開きし大學校も一時勢力を顯はし其の黨員皆上帝よりもなや無きと思をなせしも漸々衰頽に及べり昔時埃及の幻術家ヤンナス及びヤンブルスの一時期モーセに抗抵するの力充分なるが如く見へたりしも漸々其の思を現はすに至れり

第三 佛國の景況

前世紀の末に當て佛國に於て不信仰主義を擴張するの計畫甚だ盛なりしも到底耻辱の外何の結果をも現はれざりき抑其の頃は佛國獨り歐羅巴洲中の最上位に居り華美を極め學藝に熟し全國の政を握る者は皆非常の人傑にして最も非常の改革を行へり此の時に當て基督敎に殆んど廢滅に歸し安息日さへ禁止せられたり而して唯不信仰のみ

尙ばれたれば不信仰は三千萬の人民の上よ在て自ら其の權柄を振へり世の人當時を評じて「道理ノ御宇」と稱し啓蒙の世に達したりとなせり是に於てか勸善懲惡の制度地に墜ち社會狂亂互に血を呑み罪を吐けり法律の音聲も虎の如き男豹の如き蟻の復讐の號吼に由て沈没せられ道理の御宇は反て恐怖の御宇と變し恐怖去て後怨惡嗾き怨惡去て後憤激嗣は憤激去て後狂亂の統轄する所となれり其の結果實に驚くに堪へたり讀者少しく注意する所なれ夫れ純粹なる不信仰を以て好結果を生せしめんことを望むも決して得べからず是れ猶ほ惡疫を蔓延せしめて以て衛生の道を闕かんことを望むと一般あり

第四 不信仰者臨終の有様

初て論より証據も云へるるとは人の決して拒むことなき所あるが實に不信仰者臨終に於て全く勇氣を失ふものなりホ、デ、氏は獨り室内

に在る時に限り數々苦惱の感觸あり夜中燈火の消えたるを見れば忽ち恐怖に由て號泣せり人若し死の事を語れば氏は之を聞くことを欲せず死と云ふ一字は其の最も憎む所にして氏が將に死なんとせしに至り予ハ將ニ黒闇ニ飛行セントス」と云へり

少オルテ一曾て湖水に舟遊せし時俄に暴風起りたれば忽ち恐怖に堪へずして故に跪づき神の佑助を祈れり暴風既に己よし後某卑屈にも「吾母曾テ祈禱ノ念ヲ予ガ腦中ニ入レ置キタレバ遂ニ其ノ念ヲ脱スルコト能ハザリシ」と云へり

少オルテ一將に死路に就かんとするに當て恐懼甚しかりしが醫師の來るや少オルテ一呼はりて曰く予は神及び人より見離されたり醫師よ君若し六ヶ月の時間を予に恩給するよしを得ば予は一身の價を折半して之を君に呈すべしと醫師答へて曰く先生恐くは六週間たも生

存する能はざるべしと少オルテ一曰く然らば則ち予は此より地獄の途に足を發せん君も予と伴へよと云つゝ暫ありて氣を絶せり

ヂテロッド及びダレムパーは甚だ死を怖れたりペーの臨終は苦痛甚だしく精神錯亂して或は神を誹謗し或は基督の救助を求めたり

エマルソン死に垂んとせし時に於ても亦或は祈り或は謗りつゝ臥床の上に匍匐轉輾せり

ニウポルトハ臨終に於て語を發して曰く嗚呼地獄天刑の堪ふ可らざる痛苦なる哉と

抑此國(米國ヲ指ス)に於ても數多の不信者死したるが中に一人の快然たる死を遂げし者あるを見ず多くは惘然苦痛の中に死するあり醫師ク一

ハル氏が臨終の書翰とかや文面左の如し

私儀呼吸之病氣者追々快方に趣き申候得共夜中に相成候得者甚だ足

痛致し隣室の之往來も自由に出來不申此處をらバ迎も春迄者活多  
 らへ申間敷候扱て私儀甚だ坊主録にて坊主之教ふる教法までも付た  
 らしく御坐候得者未來の事杯は一尙信用不仕又其事に就ては私甚だ  
 不案内之事に御座候左候得者私儀は先つ何も信仰致さず何も望まず  
 何も恐れず何も个も構はず此儘冥途に出立可仕覺悟に御座候云々「予  
 思ふに此の書翰は不信者にして死を恐れざる人の録せしもの、如く  
 見ゆれども實甚何も望まず」と云へる一言にて其の心中を察すべきな  
 り是れ恰かも怯弱なる小兒が夜間墓所を通行する際故に嚇されて勇  
 氣を保つと一般にて某未來の念を絶ちて自ら快しき事すまにあらざ  
 れども單に死の恐怖を除かぬがため故に斯く書せしなるへし  
 或予に謂て曰く「予ハ下ノ氏は實ニ哲學家の如くに死せりを予答へて  
 曰く彼が最後の存様はアヌマヌマ不君が記載せし所とは實際異なり

たりと雖假よスミ氏之言を眞實と看做して論ぜんにヒユーム氏を  
 哲學者の如く論せりとは斷言し難かるべし如何とあれは其の臨終の  
 時に當て遊戯をなしたつ、笑ひ居たりとスミス氏は云ひけるも予ハ斯  
 の如き振舞は哲學家の死する時に於てあるまじき事なりと思惟する  
 なり人之を以て可とするあるも予ハ寧ろ自己の犯罪を懺悔しつ、刑  
 場に死する者ハ尙ほ之に勝れりと思惟するなり蓋し死は人の永眠に  
 外ならず也雖其の死するも當て笑ひ戯る、が如きは甚だ輕忽に過ぎ  
 たりと云へざるを得ざればなりデヨンソン氏ヒユームを評して曰く  
 爰に人あり性質宗教の眞理を探究することを務めを常に意を他方よ  
 轉せり此の人ハ天帝が天使を遣して以て其の心を改めしむるに非ざ  
 れば死に臨むも思想變ずることなかるへし云々  
 詩人西ントオメリ能く詩を作りて以て不信者の臨終と信者の臨終

とを形容せり左に之を掲ぐ

不信者の臨終

視よ不信者の臨終を

顔はめをさめ身はふるひ

憂の雲にかこまれて

穢美どころか舌氷り

齒くひしばりて眼もとぢま

いと苦し氣にさけびつゝ

何の望も樂も

うせて泣くく死にはつる

其有様ぞあはれなる

信者の臨終

とを形容せり左に之を掲ぐ

不信者の臨終

視よ不信者の臨終を

顔はあをざめ身はふるひ

憂の雲にかこまれて

讚美どころか舌氷り

齒くひしばりて眼もとぢず

いと苦し氣にさけびつゝ

何の望も樂も

うせて泣くく死にはつる

其有様ぞあはれなる

信者の臨終

扱も信者の臨終は

見るも見事の有様ぞ

眼くらます唇の

色紅にうるはしく

胸は望をまくらと

いと穩に手をのばし

別れを告て限りなき

安樂國に至らんと

一息とりて眠るあり

夫れ不信仰の人の常に黒闇恐怖及び不愉快の中より沈み生て純潔を  
失ひ死ての望を失ふものなり又不信仰の人の神の誠實仁愛聖潔公義  
恩恵を自ら感得すること能はず又不信者は基督教を以て自ら愉快を



取ること能はず反て怨恨を生じ怨恨の所爲を起し怨恨の結果を顯はすべき法門とすべし

附言

第一條 聖書若し誠ならば是れ誠よ悪人の恐るべき書物あり其の教理は人の愚弄とべきものに非ず又嘲笑すべきものにあらず之を讀む者は不品行なるべきよあらず又之を輕忽すべきにもあらざるなり抑基督教を信仰する者は常に嚴格實着なるべく決して不信者の如く浮薄の風儀よ流る可らず

第二條 聖書果して誠ならば是れ誠に謙遜ある善人の悦ぶべき書物あり聖書の即ち渴望者の甘露にして無頼者の鉄鞭あり聖書は其の皎々たる表面を敬神者の方に向け暗黒の裏面を不信者の方に向くるなり然らば敬神の徒は常に歡喜踊躍すべし蓋し聖書の約束の必ず成就し救は必ず全ふすべければなり

第三條 凡て基督教の行はれたる國に住居する所の不信者の此の宗

教に抵抗する際甚だ不正の所爲を顯はし時として陽に信者の眞似をなすものなりニウインゲランド州のイーサンアルレン氏は米國獨立の戰爭に於て大隊長に任ぜられたりしが勇氣と云ひ愛國心と云ひ才能と云ひ不信心と云ひ皆甚だ強くして實に敵國の兵と戦ふのみならず又基督と戦ひて其の教法を討伐すべき狡猾の書を著せり此の人妻を娶り女子を擧げしが其の女成長の後不圖重病に罹り病益篤く遂に快復の望を失ふに至れり斯て父アルレンハ素より不信者なりしも母は基督教を信じ平素此の教法を以て其の女を訓育したりければ女將に死せんとする時に當て父の教に従ふべきや將た母の道に従ふべきやを疑ひ之を両親に質問せり此の時母は如何に思ひけん黙々として答へざりしも父は女を愛憫するの情に堪へず遂に己れの持論を枉げて其の女に

謂て曰く我女よ爾の母が教へし如くに信仰せよ母の言誠ありと」  
 扱て基督不信者が當に受くべき刑罰あることを預言して曰く「凡ソ我ヲ棄テ我が言ヲ納レザル人ハ一ノ之ヲ罪スル者アリ即チ我カ言フ所ノ言ハ此レ之ヲ末日ニ罪スルナリ」(約翰傳十二)と  
 第四條 信者は勉めて基督教の眞理を詳かにし以て此の教は古人の巧作にあらずることを世人に知らしむべし蓋し之を學ぶは教敵と争はんが爲めにするも非ず智慧溫柔を以て信仰の道理を世人に示さんが爲なり

第五條 子が特別に陳べんと欲する所は則ち信者たるものは當に其の信心より背かざるべき善行を顯はし由て以て世人の口を緘せし夫れ謙遜深切耐忍慈愛忠恕の力及び聖靈の感能は古今常々基督教の徳を証するものあり信者若し其の言行を謹み心術を正す

する時は不信仰の黨たちが基督教に敵たぐして己れを満足まんぞくせんと欲すと雖是れ難い哉

西教辨終

正誤

丁	行	正	誤	丁	行	正	誤
二十二	四	たりとの	たりとを	八十四	十二	少く且つ	深く且つ
三十六	二	ボルフリー	ボルフリー	八十五	六	ギリシヤ	ギリシヤ
三十八	二	死するを	死すること	八十六	五	欲せば	欲せず
四十	所々	モハメット	モハメット	八十七	八	とき必	とき必
四十四	七	歐羅巴に於て	歐羅巴に於て	八十九	三	効能	智能
		起るべき今後	起るべし	全	八	天刑	典刑
		の戦は即ち主		九十四	二	こと自己	こと自己
		義の戦争ある		百四	一	人を誇らしめ	事を誇らしめ
		べし		百七	二	卑屈の人を	卑屈の人が
四十五	二	断言と氏も	断言とるも	全	五	啓學	啓學
四十八	二	事を	事ヲ			嗣 <small>つ</small> き	嗣 <small>つ</small> き
七十九	十一	(耶穌の)は	(同)に				
八十四	十一	自負の心ある	自負のある				

する時は不信仰の黨たちが基督教に敵かみして己れを満足まんぞくせんと欲すと雖是れ難い哉

西教辨終

正誤

丁	行	正	誤	丁	行	正	誤
二十二	四	たりとの	たりとを	八十四	十二	少く且つ	深く且つ
三十六	二	ボルフリー	ボルフリー	八十五	六	ギリシヤ	ギリシヤ
三十八	二	死するよそ	死とること	八十六	五	欲せば	欲せず
四十	所々	モハメット	モハメット	八十七	八	ときり必	ときり必
四十四	七	歐羅巴に於て	歐羅巴に於て	八十九	三	効能	智能
		起るべき今後	起るべし	全	八	天刑	典刑
		の戦は即ち主		九十四	二	こと自己	こと自己
		義の戦争ある		百四	一	人を誇らしめ	事を誇らしめ
		べし				卑屈の人を	卑屈の人が
四十五	二	断言を氏も	断言をともも	百七	二	啓學	啓學
四十八	二	事を	事ヲ	全	五	嗣 <small>つ</small> き	嗣 <small>つ</small> き
七十九	十二	(耶穌の)は	(同)に				
八十四	十一	自負の心ある	自負のある				

明治十八年十一月四日版權免許  
同年 十二月刻成

定價金四拾錢

福岡縣士族

翻譯人

菊池 武信

東京下谷區練塀町  
貳番地

東京府士族

出版人

福原 忠茂

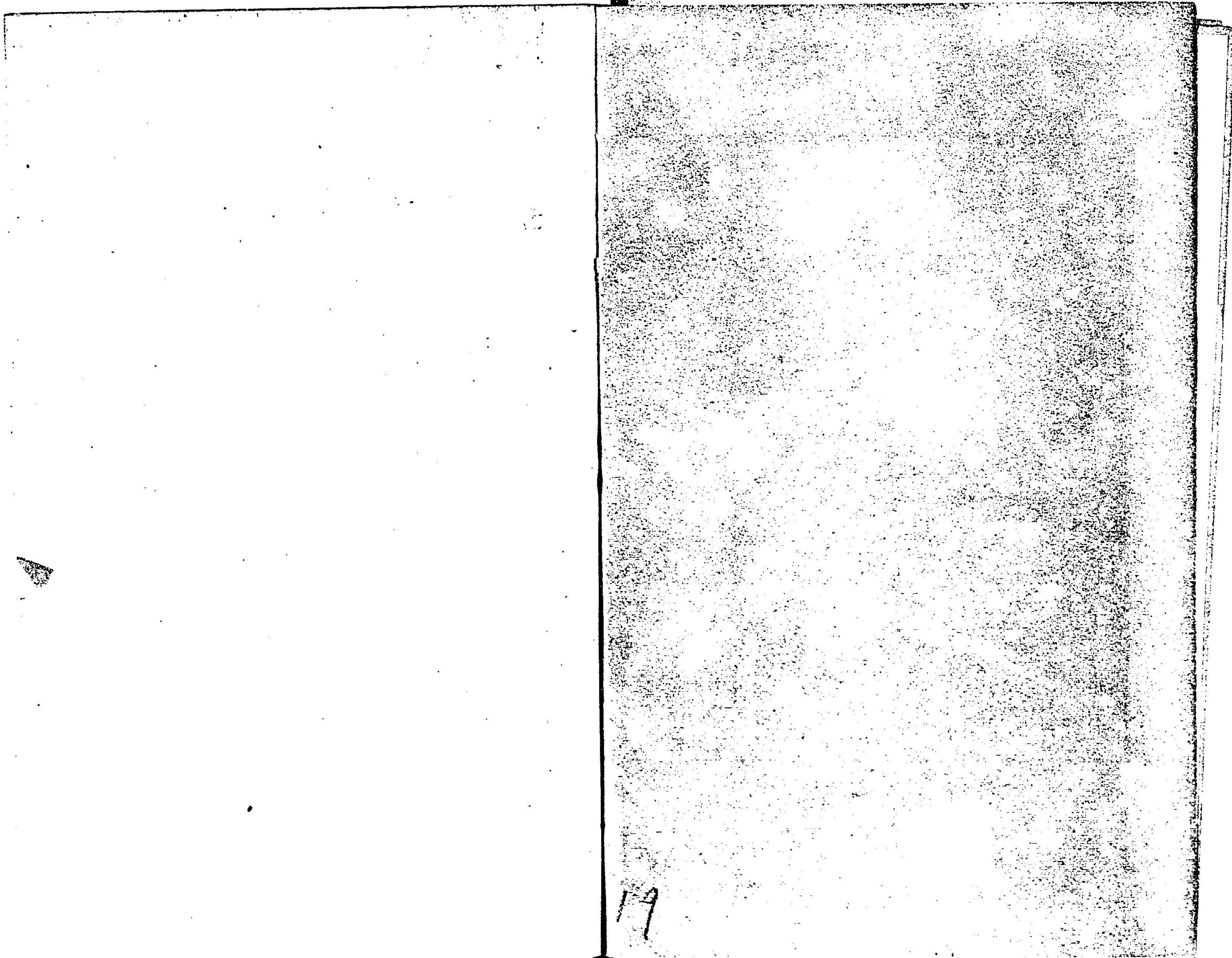
東京下谷區練塀町  
二拾番地



發賣所

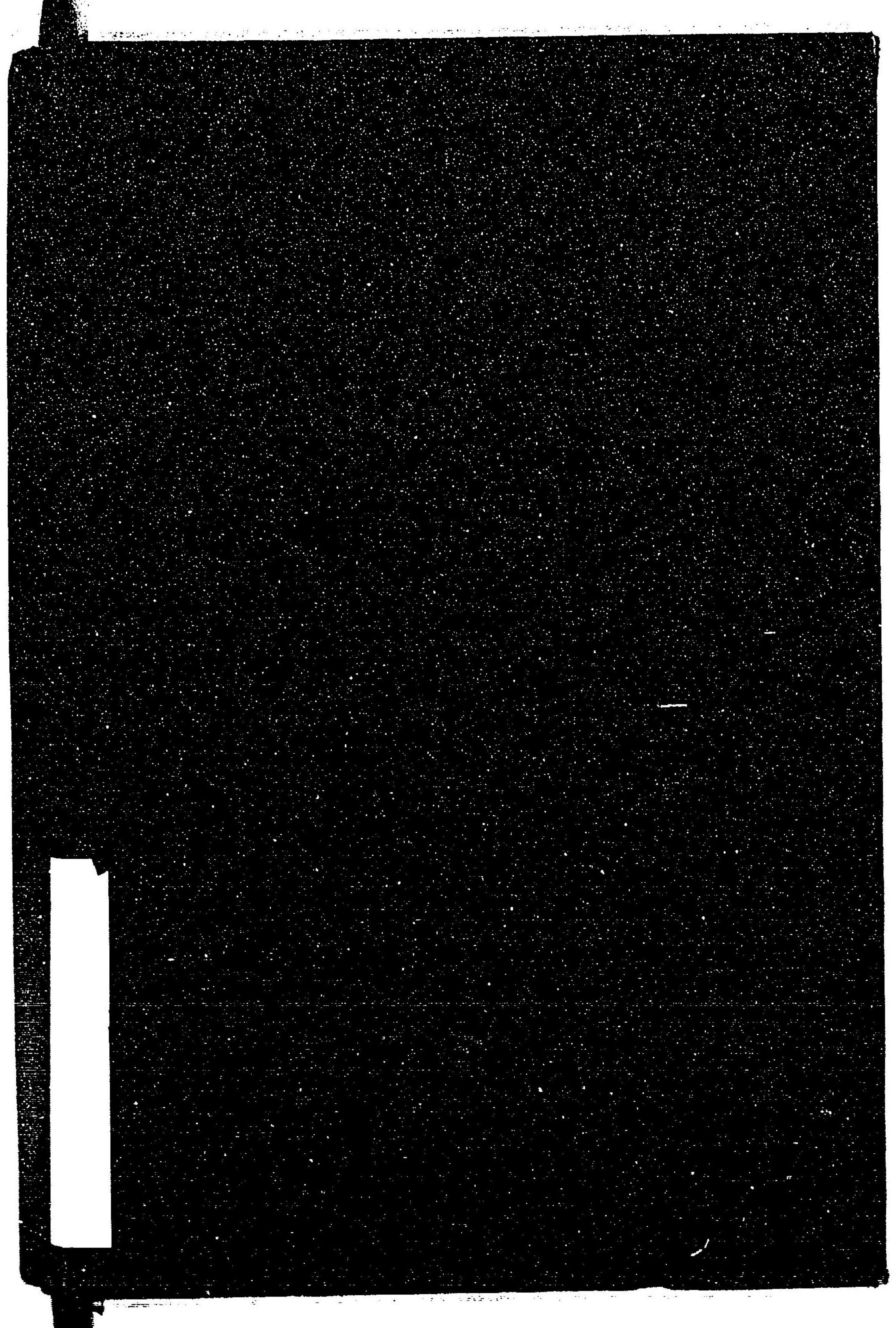
東京京橋區三拾間堀

警 醒 社



17

31
230





31  
230

020890-000-1

31-230

西教辨

普蘭摩 (プルーマー) / 著

M18

ABI-0724



